新續古今和歌集 下

乃陵文庫

新續古今和歌集巻第十四

戀哥四

弘長元年百首哥たてまつりける時

寄鏡恋を　　常盤井入道前太政大臣

わすれしと契りは誰にかはりてしますみの鏡なれてかはらす
影しらす

大江茂重

夕暮をたのむ情の袖にすは契りそ頃の命なりけり

權大僧都賢雅

恋ひあまりまたとなかめしとしもや暮待らの命なりけり

祝部成胤

契りと頼むかひもなく人は今のつらさあれも

新玉津嶋社にたてまつりける哥の中に

藤原實勝朝臣

あふことを年ある夜のあまりに生きて別れとそいひし絶えん

からうしてあひ見し女の許にまかりけるに

みるめ海にけり朝よりもおひのおちこちにまたそつらすとて

蓮生法師

秋のすゝしき流さとをかしき下紐の誰にとまた契らん

寄偶恋といふことを

後小松院御製

みむとふ契をちて消にける野辺の露乃志のゝめの風
家にて百首歌よみ侍りける時後朝恋
藤原為忠朝臣
恋しくてまたおもはれぬ物ゆゑに君をなれさしとふは織
逢後増恋といふことを
藤原伊長朝臣
こひしくておもはるゝさへなきひとを別れしよりやたえん
源義行源氏物語の巻々をたいにて人々に
歌よませけるに若菜の心を
平宗宣朝臣

行やらて待ぞ迷ひぬる白露のおき別れはしめくまの空
貞和百首歌に　按察使資明
立かへりおもふ程まで待かねてみよ別れまし秋の夜の山
後小松院位におはしける時人々の歌を
とり集めさせられて歌合まゐりしに
後朝恋
権中納言実清
わが通ひは待こころさへもまた待や去年てぞ文もの数にならん
称名院入道内大臣よませ侍りける三十首歌
に同し心を　権中納言宗泰
ゆふまぬ鳥乃又辞の声ましりつき別れは夜をこそ思

寛治二年百首哥に寄雲恋

冷泉前太政大臣

あふことはかたゐ中なる白雲のそらにのミこそなをいかゝせん

承安百首哥に　前大納言為世

うきことやあまの雲ゐにはらひてもそらかゝる中なにゝなしかるらん

民部卿資道

いりせやまなみの中にはゆかふかくつゝきりなともなかすらん

百首哥たてまつりし時

後二条入道前太政大臣女

いかゝせんあはれいひはたゝ舟やみかの松本風ふきまさる思ひを

もしらす　よそ人恋しきす

柏木のもりて浮名はたつものをあやな侘しきなかのかくれなかるらん

題梅恋といふを　前大納言親雅

今は我まよふ涙の玉かしはふくみかきまて何欲せん

おなし中納言実資

涙そてなみたに相なかれねをはなたかく袖のなかとはしらん

題恋を

権大納言道因大臣

人志まゐ袖にはなれ我済ぬせといふそ世よりも涙なかれん

権中納言興経

いかなる山のをちにもゆくへの人はゆるかなる涙かなかれん

題しらす　　前大僧正禅守

袖にたにせきもとめぬ涙よりかはりにもまた浮名なりけり

康安二年内裏にて人々題をさくりて五十首歌仕うまつりけるに忍涙恋

崇賢門院

涙をはおさふる袖にせきとめて浮名からやまくらにもらさん

寄山恋といふ事を

左大臣

なき名にはたゝすなよ富士の夕煙何かはよそにくゆる思ひと

百首歌奉りし時寄枕恋

藤原雅永朝臣

しられめのまた世ならぬのこと枕かはさぬ中にわれや乱れん

寛治百首歌の中に

前参議忠定

なき名のみたつの市とやさわくらみさりて今日のなかそ

題しらす

紀之盛

偽のあるをはしらぬ世のこなたさきなれとさ人の言

わすれしと歎けるへの又なきものをとは人

あちて待まかにけるさんとひかる人よ

かりつく

俊頼朝臣

はしく梓の袖にぬれ衣を引重てもかなしく哉

寄雑恋といふことを

よみ人しらす

いかにせん思ふとはれてねよ見てわさのことは浅く風さと

絶後形恋を　法印慶運

会見ぬれもかりしに中々ふかき思ひ浅くそあらぬれけり

弘安百首哥に　静仁法親王

花とにて田子の浦浪そ寄てこえとそふかれてねをそかさ

寄下草恋を　成恩寺関白前左大臣

梓ねてみてもふかき浦の世にもうつり浦浪の下草

家百首哥合に寄遊女恋を

後京極摂政前太政大臣

雅とふくよせてかへる浪枕うきあふ舟の契とはまて

貞和百首哥に　前中納言為秀

あまり河かわつきなきさにやそ浪の関とむかな

題しらす　祝部成光

みすの河みも浦寄ててかなる人の名さきせぬ名れ

賀茂雅久

かさやまとなの末みをしれは契や浅きかくさ契

文保百首哥に　芬陁利花院前関白内大臣

ぬくらぬ契をかけしかなかに山の井とみたれぬ

寄江恋といふことを　待賢門院堀河

みちのくの入江の波は浅くなれとなへて人の心をそしらて

貞治百首歌に奉りし恋

藤賢門院但馬

今はたゝうきにまかせつ月もみよいかなる人の心なるらむ

延文二年百首歌によみ侍し心を

後勧修寺前内大臣

浮身のことはりそよかゝる捧もさこそつれなき人の心に

百首歌奉りし時寄草恋

前大僧正義運

逢ことをいかにたのまむ忘るゝ人の心を秋の萩かは

恋歌の中に

よみ人しらず

我袖に露よ移りの言の葉の枯もはてなへき契なりけり

万秋門院一条

かのつらき心をかはらぬ今も猶うとくなりてそ契りそめけむ

寶城法師

人心あさきにまよふかたへ一すちにたのむもはかなき

夕恋を

従二位為理

まてしのとおもひしものをよそにいかなる夕の人の心なれ

永和百首哥に絶恋

儀同三司　資

いつまでかたのしとなきけん秋月ひとつよわりゆくくれ

題しらず　中臣祐臣

今は身におもひ捨てしかぬ篇なりいとしらぬ庭雲風

切恋のこゝろを　法印慶運

逢ふことはあひみぬ中と後の世の篇の現よりみやしるらん

物さき詩の句を題にて哥読侍ける時　波畫騰

歌斷と云ことを　雅賢上人

おもひせく涙の河のよともあはでとたえむ命我しらるみそか　さ

恋哥乃中に　宗身法師

しぬばかり思ふとしらばもとめふみてぬ人あはれなれやへの名はまね

百首哥あそさりし時寄海恋　たゝ大臣

なかしくはおもふ心のあさくれ海をへたつよしせくしつてそなん

有婦恋といふことを　神祇伯顕仲女

君か為わかみもせきとめすは吉野川あれてやくもとまもきそ　まし

題しらず　中納言家持

あら玉の年のへつまて何ひみすいかにもしつの心なゆかしも

あしてみよせかりにかなりける人よ
大江匡房卿
あひみてはやこえもせんかりけりもむかしもふるさとこひせ
ゆふこさきの句と聞て百首歌よみける
時三年不見恋といふ事を
頓阿法師
なくさめし玉つさをたに猶もみよ雲井の空にかよふまて
弘安元年百首歌に
安嘉門院四条
きゝつらんあらしもまつてわすれむかしにかはる人の下紐

寄鏡恋を　二品法親王尊胤
くもりゆく鏡の影は見る人の心のうちもあらはれにけり
延文百首歌よみたまひし心を
入道一品親王尊道
何を鏡くもりやすきはこゝろそとりにみし世の面影そうき
後鳥羽院に五十首歌奉りけるとき
寄雲恋　後京極摂政前太政大臣
くもりゆく人の心は白雲のあとにてつれなき契なりけり
寄開恋を　源通光卿
隔てゆく人の心はあやしくもそふしも何の實は有けれ

よみ人しらす

かきあけて滴つる中よぬれまさり君か玉つさなりの関ゝる

永和百首歌よ　後八条入道前内大臣

いくたひか又立かへりゆきかふらんあふをはかなく恋すしる恋ちに

深守法親王

立かへり又しらふへきさそなかなきわかれし道のちそつらき　さへ

逢不会恋乃こゝろを

前大僧正果守

立かへりきて恋なは逢ことも今一しかと命とおもひそめけめ

藤原雅親

なからへてしも又なけく命こそあすまてへたつつらさなれ

中務卿宗尊親王家百首歌合に

惟宗忠宗

いかにまた恨よそてもあひ見てそ猶さへ人のつれなかるらん

貞和百首歌よ　左兵衛督直義

なかなかにとはれはいはんあひみしも世ひとつの契かねよ

恋歌の中に

前大納言実郷

うらみてもその秋の夜をまつそてらしも袖の契てかな

千五百番歌合に　西園寺入道前太政大臣

かくしつゝ消ゆかはありしよの夢をうつゝとなくさめてみよ

醍醐入道太政大臣

霧の有明の曉に消えてあへなく帳にむすほほれつゝ

寶治元年九月十三夜内裏十首歌合

逢不會恋　　太御門入道前内大臣

今はたゝこえし袖の移り香も人のつらさにおもひかりそ

後深草院弁内侍

使過とかつはさこそおもふらめやそこはかなき程そある

恋のうさとてうらみ侍けり

よみ人志らす

恨そとも過し時にはおもひしか人の情なりけれ

洞院摂政家百首歌に

正三位成實

恋みてもうらみぬ人のこゝろをもいまはさき物と志りせは

寄松恋を　　前中納言為忠

あまを舟の松かれしてとはぬ音はみさきと思ひ出そや

亀山殿七百首歌に寄松恋

中納言為藤

またなしふる河のへにあへる松も又あひ見しと契やはせし

百首歌よみてまつりし時

左近中将定親

つれなくてみしおもひみぬ契りハへうさこそまされ二本の杉

永和百首哥に恨恋

権大納言為遠

見るめハ絶す浪ハ蜑のすむ里そとてもとひこぬ

家に百首哥よみ侍りける時逢不会恋を

閑院摂政前太政大臣

芦乃海の釣のあまハ絶ぬまて猶漕わたる蜑ハ さらし

嘉元百首哥奉りける時同心を

二品法親王覚助

ちかひてし人の命ハおもはれきいたのむへくや行のこらん

津守国冬

あふことハなをそへてかさねし命をもやしらす月の契を

光明峯寺入道前摂政家百首哥よみ侍りける

恋を

従二位家隆

さひ河の遠き水の上すむ秋なる秋の月と恨めし

題しらすて

藤原盛方朝臣

わすらるゝなれそと思ひきや川ゝの心やいせきさぬらん

寄関恋

平宗宣朝臣

絶なまし芸折もとひ郷の御ちかひにかさねもしけれ

玉津嶋社によみて奉りける哥の中に逢不

今恋　　　　権中納言雅縁

こゑはふかくしのふ心のまゝにまたるゝよそまたきまし
たかし心と　　　　雅永朝臣

こひしやそこはゆめのとこともおもふ中に見えけれは
後山本左大臣家繋縁に続けり内侍頂郎の法ら
くれ来るしめて拂ひて又いつくとかけ
まいこのあひ乃はちしにもの枕をしのへよ
となめけつふまりてくともしつまれ
なほ袖ならそいしのおもひよりもひつき
かけり　　　　平親清女妹

こひしや庭火乃影にみえしその三ゆるよのさらにかつらは
影しらす　　　　前大納言実冬

恋よりそ苦しかりける年をへて又なりにきをとまてかな
正治百首に　　　　土御門内大臣

ありしよをみそてぬ夜の枕にも拝しめしき鐘乃音哉
家乃百首の中に遂不逢恋　　　　洞院摂政前左大臣

あひ見しはかりしらてすこし今は夜ものとしもなそなき
おもひし心と　　　　右大僧正果守

思ふこと伊勢のあまをすむはかり一秋のやまれ山つくは

蓮生法師

あさひのゝみかけ二本の松はよそにても落ちれなとかなしらん

源持氏卿

いにしへの落やむかしの夢ならぬうきなはかりのすみても

絶恋の心を

前中納言為秀

いまははたさまてうらみのおもひすともなとさらにこゝろ問ひけむ

寄月恋

源頼之朝臣

忘れ来の袖の月よはゝ涙くもりてさきさらなむ

前大僧正教定之家の歌合よなれへし

人ゝと

藤原基継

ありし夜の夜はいかにねすとも枕とそ又いかにとなすらんの有明の月

永仁二年内裏にて五十首の御会講せられけるに思出切恋といふことを

為道朝臣

歎侘せむその夜をこそやとらし新の月ものこらん

恋歌の中に

従二位家隆

ほのかにも涙そくもりて袖ぬれしみし俤や月にそふらん

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

見る程そしはしなくさむ歎つゝ寝ぬよの空の有明の月

題しらす

寂蓮法師

月みることなくさむくそなりきたのまねよふ山家の
心
よゝへしらす

思出ハ昔の涙よもえかゝらん契し月乃たかしくハ

応安二年九月十二夜後光厳院に三首
うらせられけるに寄月懐旧といふことを

秋の夜よみし背の袖の上に今は涙をところ月の影

建保七年二月内裏歌合に暁更懐旧を

藤原光経

在明の月とその秋ハいつくまてすむ旅の契らん

老懐といふことを　前中納言公雄

今はよにこひし昔のこゝにつれても捨し老の命ハ

文保百首歌に　中宮大夫公宗母

後とくとまつといかなし小年よぬ思ひもしるといふなに

貞和百首歌中に　徽安門院小宰相

逢といふを満てとゝ契しねよ何と頼むなからふる身そ

後九条前内大臣家の歌合に

按察使親朝

かはりとひ絶は年月のふるさに歯されし人の憂き

延文二年百首歌奉りし　寄橘懐

前大僧正賢俊

なからへん契の程も志ら玉のをもむすひし此橋よりきて見つ

永和百首歌に　後香園院入道関白前左大臣

さらすともなくやたのましわか玉のをのおはらんいく

権中納言為重

色かはる後とこそ人年のはにかきし海の玉いゝふと

後小松院にて人々題をさくりて五十首歌

そらしまつりけるに久恋を

勝定院贈太政大臣

年月の人の契もわかぬ世に狩りのまてとおもひおちそ

百首歌よませさせ侍りし時寄木恋

左衛門督實雅

あくらいる我歌にへ年ふりぬ人のたのみのたえまは

弘安百首歌に　前大納言雅言

年月をふるれきさ田乃更に出しにへよ

恋歌乃中に　源経氏

くみ出るへあるまとしふりぬる中に相思ふそて

貞治二年百首歌中寄草恋

正三位知家

はのとやかくきる年へぬれは草村をとみぬ人へとらひ

あえかく

新續古今和歌集巻第十五

恋歌五

題しらす　　紀貫之

秋ちかくの下葉はよそにみえしかと独ねんとは思はさりしを

後福光園摂政家歌合に寄萩恋といふことを

頓阿法師

物そおもふ下葉色こき萩の戸のおくしらぬ秋もいねかてには

百首歌めされし時寄原恋

前摂政太臣

まくらにやとふこさねはまねきしま萩原しのふる色にあかつきそ

恋歌の中に　　殷富門院大輔

あた人の心の花はおもひきやうつろひそめしこのみのはなの色

寄女郎花恋といふことを

権中納言通俊

女郎花むかしを袖によそへてもあまのうつしにこと妹やとらめん

新玉津嶋社三十首歌に

後押小路前内大臣

月をこそまちても人の恨しにのこそこそまちて中々にめかけ

弘安百首歌めされける時

性助法親王

さらなから絶てはたえてつらくてもあふ人をおもふ身は

逢日増恋といふことを

成恩寺関白前左大臣

明ぬとていそくとすれはおもひ川なかすや浪の関となるまし

等思両人

源義将朝臣

年月へぬ浪の露は玉のをよそにさへこゝろことに思ひ乱て

久恋を

中務卿宗良親王御歌

色見えて思ひみたれとしらせしはなみの立ことみそめや

延文二年百首奉りけるに

等持院贈左大臣

引こふ人の心はつらさかれ思ひかへさぬ中そくるしさ

文保百首歌に

前大納言為定

我のみそ思ふ世なから歌をとやられ待と我のますらん

題しらす

三条院女蔵人左近

来ぬくさ見へともおもひもしらるれは猶いはゝんれ

嘉元百首歌に忘恋を

贈従三位為子

なかなか世にうきこともあらてありやともいふかそ人の思ひそへけん

法印定為

こくとしらぬ根の忘草いつかりか世よりなきかよせん

忘らるゝ中に　法印守遍

くみや今いつ瀬乃しらなみも袖のみかゝりけりを

大江茂重

かくそこそ我としらんと思ひしらぬなみたなりけり

貞和百首歌に　按察使資明

よそにみる人乃心の浮雲やいり世乃山のつてそしらん

題しらす　法印定円

いは捨人よりもわれは世をおもし秋月をみよとしらん

法印浄弁

ましはしと思ひし程や我身のつらさ思ひをそへは梅しるらん

素明法師

なくさめにみしやはしられてかへるなみの夕暮の空

千五百番歌合に　惟明親王

思ひ侘あはれまのこそれは夏をよるとて秋の上の

亀山殿七百首歌よ　寄枕恋

前大納言為世

たちかへそよるにおきあかつ枕にまくて人を恋しき

康苑院入道前太政大臣家の百首歌よ

れなしゝと　権大僧都尭尋

独のみねをおもひのうき枕よするさ波の風はいとゝ我も遠

永和百首哥に怨恋

進子内親王

たのめし世々のちきりたのめもわすれぬ身のうきにも
思ひしらすよ人こゝろ次
人はなとかくそ我も中々につれなき命とおもひぬるかな

後九条前内大臣家哥合に

按察使[illegible]朝

くやしとは猶恨むらしそれとたにふたゝひふみかへすは

寄書恋といふを

前大納言實躬

なかなかや恨むもあつさら我まひぬることはかなさと

恨恋を

平貞秀

なかなかに恨てもみん語らはゝ人の心のかはりもそする

永徳四年内裏哥合に

藤原英房朝臣

つきなさに思ひ絶ても猶あかぬ我心そ今はうらむる

新玉津嶋社三十首哥に

従三位為子

侘しともいはて忍ふるなかもなほつらき人を恨ぬる世

前中納言定宗

恨ても又立かへりしたふかなしたふには心つよさは

前大僧正果守

うき世のはゆきゝ浪の河社かけしもうらみ絶つ

思ひしらす

三善頼秀

ゆめのまた恨志をも世下紐のとけぬ人のつれなさにさへぬる

前見百そちよ

従三位為信

みをやとふ浪をしるもみるも恨そめて人にとはれめ

恨ぬの人を

法印慶運

こゝのへにしてはのこり身をまたかふるしを恨む

ほかならぬ月よ十六夜よなりける時来恨むる

右大納言為世

誰が秋の月はいつくさへ雲なしむ空の光にもとめまし

中納言為藤

とれくらしつもりてもなき月をかけてやあきらしめ

前大納言為定

身にしみて月のさむけれや思ひ我をも人の秋そ

権僧正道我

何故か恨もなく人あひ身をそむけてもしもとめよ

建長三年九月十三夜影供歌合に寄

月恨恋といふことを

前大納言為氏

待ちこゝろみよなからへてわかあめつくさる月哉
前大納言教定
絶えても人の契そらなりけり猶の山のはの月
恋歌の中に
賀茂遠久
契のこわさらみの沼はあやめ草かるさ根よねとなられ
文保百首歌に
弾正尹忠房親王
あま夜もいつならんしかまぬ月まくれぬる袖の浪
寶治百首歌奉りけるに寄螢恋
正三位成實
螢のもゆる思はしらへと恨てもいふこともすゝめ螢哉

弘安百首歌に
土御門入道前内大臣
身はつらし恨はつくしも螢火のもゆる思のたえやらんかなん
恨恋と
津守国助
待くらし待もあかしてあさゆきのことなき身とも波に袖ぬれすらん
後徳大寺左大臣家に十首歌よみ侍けるに寄源氏恋といふことを
皇太后宮大夫俊成
恨ても猶身のむかし月を待しふるさとにあはれはと 心六
恋歌の中に
殷富門院大輔
名にしへつまなき人へはさてもいきる我身なりしぬき か

家に百首歌よみ侍けるに恋歌
洞院摂政前太臣
みまの浦みの海中に摂てもつきさんとして今よと云

堀河院御時艶書合に
四條宮甲斐
浮月の人と浮しと知る重ハよりあくもたつ海も
返し
俊頼朝臣
かそめ風あえまとはへや恒こまよりあれハ海のうへ
乱しらす
山部赤人
あしたも浮へ舟のちまよ小も我ハこころ先てそ云ふ

坂上郎女
ふかれ摘そてたけり寒露ありひく時よ恋の寒けさハ
一條前太政大臣
ときふ海の床よふしまつれつ通さの袖ぬらし治
素暹法師
里あさきと恒よとてやとれハ山下をふへをれ世かくえ
浮きよりもさきおつめつらりけり人のりと人
小野小町
中つかりけり
ふまとうあかさりきう世中にうきめハみやとひけりける
延文二年百首哥奉りける時寄藻恋

進子内親王

あま人のまとりかぬ袖の浦によせし恋のやまぬ涙のかく

寄縄恋といふ事を

前大納言為家

おきつ鳥海士のたくなはいつくるともなき恋もせん

寶治百首に寄淵恋

後九条前内大臣

わた人の心そみえぬ我袖にせきかへしたる淵はあれとも

亀山院入道前太政大臣家百首にた

なりし心を

権大僧都教尭

うき人の心の淵つまにおちそふ袖は涙なりけり

崇徳院に百首奉りける時

前参議教長

なかしとておもひくらぬ我恋やかゝるうきみにはなからん

弘安百首に

花山院前内大臣

今よりは何をたのみにあふことも命なりせはなり

大蔵卿隆博

いつはりと思ひかぬる恋にさへ身をしるゝ心よりはと

寄恋を

平親清

人しれぬ月はむなしやつれなき涙にかゝる袖の秋かせ

おもひ心を　よそ人にしらす
ゆくとききかんとて吹しに秋月をともなひ峰の嵐を
寄玉恋といふことを
前関白太政大臣
袖よりも涙のそてよ白玉か何そは露の契りなるらむ
恋哥の中に　九条右大臣
松風のおとせぬ河はめにみぬ人を我とおもふなるをり
俊恵法師
秋風をまつや吹あらねとかりや恋せぬ人はよそにしらん
五百番哥合に　前大僧正慈鎮
秋恋はゆくへもなきなかめよりむなしき空に嵐そふく
百首哥奉りし時寄鏡恋を
前参議道敏
思のますみの鏡せめてさやかなる影はのこすともそれ
丹後守にまかりけるにあひてのちひさしくおとつれさりける女のもと
に文人つかはしけるよしきゝてつかはしける
藤原兼房朝臣
海とみや人のこゝろは後まもりつゝ置の宮門の霧
恋しらす　よみ人しらす
初恋く草葉にやとる玉露のさえかたりもなき影は

文永二年九月十三夜亀山殿歌合に
絶恋を　　冷泉前太政大臣
あはれなと今はさみぬ理になり迄ても猶袖ぬらすらん
人はかはりてたとえりとにつらけれ
伊勢大輔
おちつりす木葉くれの忘れむともみてはゐるもあまたけれ
文保百首歌に　今出河右大臣
なかく不絶ぬる後の忘水世にすむとこそ人は忘れめ
前中納言雅孝
くみてしるとめもかはらぬ什をと忘れてしとおもふかなしさ

永和百首歌たてまつりける時
前大納言為遠
ひとかたにつれなきからもつきぬとも更にかゝる人の心は
寄草恋を　法印慶運
かれてふ猶しのふは忘草うすれても又人のとふらし
文保百首歌に　弾正尹忠房親王
あさふのうちにしひしとのぬはゆくは袖をも人やしのふらん
ひかりくにひかえるゝ人のありしに
権中納言定頼
つれなさにいひ絶ましと池水の清ゝみあへぬは涙なりけり

貞和百首歌たてまつりける時

前大納言公泰

涙川おもせもやかて絶ぬへし人めつゝみをせくとせしまに

恋歌の中に

源彰朝臣

ゝ月のつらさをとこゝろまにいやまさりゆく中となりなん

寄雲恋を

妙顕法師

今はとておもひもしらぬ横雲のわかれし空そうらみなれける

建武元年八月十五夜内裏にて人々に

のこともに五首歌つかうまつりける時寄月

絶恋を

堀河前関白左大臣

忘しよはつらさにたへる月影もいつまて待とかこちかねけん

藤原行房朝臣

身のうさは世々の契はむすひてそかゝる月そ袖にのこれる

応永十六年九月十三夜内裏にて人々題

をさくりて百首歌つかうまつりける同恋を

後三条入道前太政大臣

契しもかはらぬ世にもすむ月や昔の袖の涙とふらん

思絶恋をよめる

権大納言為遠

なさけなくそといひそてうらやはかなき契の末はうきなかりけん

つれなき心を　藤原元康

契りすゝめせてし人めゝを思川おさへかねてはうきもしらなん

月のかたふき來人のとひもりけるに

大宰帥敦道親王

わすらるゝおもひいかゝや山の端の月影とそそのかけくもを

洞院摂政家百首哥に

常盤井入道太政大臣

絶はてし人の心そ涙川なとみなかみのしめぬなけけ

絶恋を

兼好法師

うれしひまこれそ限とこゝろはいまもまたきむ人あたり

あかしんを　源持之朝臣

帰らし恨今そおさらなきえきうつる人の契より

千恨絶恋といふことを

よみ人志らす

かなしひらし絶ぬふみてぬまくまと來る我かこゝは秋風そ吹

弘安百首哥よ　大藏卿隆博

隔れをは恨し夕暮は恋しきまてふかくになりぬる

百首哥よみてさつりし時寄獣恋

前右衛門督為盛

駒のあしをつまはけしとてやまはけらくる我を志らぬおもひか　いさかん

文永二年九月十三夜亀山殿五首歌合に絶恋

福光園入道前関白左大臣

こゑまでもたえすかよひし通路の枝の末葉やまとふ雅のあきそりけり

兵部卿隆親

うらみんをもよそに通てやなくさめむ我をとふらせら秋の夕暮

前大納言為氏

忘れしと契しなかのこゝの夕暮をいつまてとかはまちも絶なん

按察使資平

いまそら絶ましかりけん身の通路も昔よりけに荒まさりけり

建保四年閏六月内裏歌合に

正三位知家

と通は昔よりけれ夕暮にたえしも里の荻のうはかせ

寄枯恋を

藤原秀茂

かれはてし人の心の秋風よまてはなきされ枯のとかれて

初冬恋といふ事を

権中納言俊忠

玉さかに逢夜とれもかなしわかれは冬より恋の限なりけれ

弘長百首歌に逢不遇恋

前大納言為家

まれに逢ふのためかはもくさかりてのこかましり絶はやそそられなき

建仁元年三月新宮撰哥合に同心を

源具親朝臣

なかなかに又たのまれて世之かりのかへしとも契やせせ

建永元年七月哥合に深山恋

後鳥羽院御製

跡たえてふかき深山の色まてとと思はぬ山の橋そかなしき

後京極摂政前太政大臣家哥合に寄橋恋

前中納言定家

人心たえぬる橋に立かへり木葉ふりしく秋の通路

百首哥たてまつりしとき

関白前太政大臣

拾ひおきて橋となりにし世に絶はし中ハ絶ぬ小の逢瀬

貞和二年百首哥たてまつりけるに

民部卿為明

かよひつる人とみえし絶ちのかつらの橋は中々絶まさき

寄糸恋を

正三位義重

絶にし人の契はさいとかなしとてあすも粉あふかな

題しらす

万秋門院

おもひきやまちかくみえし通路は絶らるゝ(ん)たつてまちかん

新續古今和歌集巻第十六

哀傷歌

まいなくすたれにし歎しけるに

朱雀院御製

遠き世の風とそ今はおもふまてひかりは我身なりけり

白河院の御子春宮くれはを残して御

かくれにし後まてのこりけるはそれ日へてになり

ちりけるに大納言経信か花よりくはしてひさ

や春の宮人のかたみとして花をたむけさふらひ

ちりのよにかくなりけるをしに

常陸乳母

花よりもちりにしこそ身はかなしけれ花をそれ見よりて春ともなしと

花山院うせ侍りて後の春花をあそひしと

はかなしや

道命法師

ちりしもやすらひの春もうかりしより名残のすくれて春に

花もひとつの源頼之か遠忌に供

の墓所になりにけるに思ひのこして

源満元朝臣

おもはぬもとの花の山高ねよりこそいの子代のおもひ

普光院贈左大臣定月八日に身まかりける

ことゝ思ひ給て　前参議雅有

月影のうき世に出てきみしもあきらかにみえしかねの雲かくれ

等持院贈左大臣かくれ給て五月廿日あまりに

つかはしけるに従三位有範かもとにつかはし

ける　藤原高範

時しもあれ袖よりさきにとけそへて五月も涙もほしかぬ

なかくるゝ給ひぬるに五月をとこしたれまいら

ふかくなる　民部卿顕頼

五月雨の空も限はあるものを人のやみそはるゝ時なき

中園入道前太政大臣かくれ給ての比先師

益守備正たゝしく身にかけし文の年月

夜五月雨を　前大僧正果守

わか流れこその涙の夜衣くちもはてぬ五月雨の空

権中納言清長身まかりてのちてなれし

給扇をみ給ひてしかしくたまはりまゐら

せけるをなとおもひしめいて

後小松院御製

袖のしく扇の風も悲しきは別し人の名残の露

藤原重経身まかりて又の年の

七月七日小筆年月てかれ給ける筆とりて

今はきたなしすてをねかくおかし給けれは

参議家經女

妹とせはあらむ世をこそたちておなしうきねに世をやはらさん

孟蘭盆のこゝろを

藤原隆祐朝臣

なき人のはかなき世より西方の教文ゆく秋のとり火

ある金剛院に侍ける法を修ねとさて年はみな

むなしくなりけるもなとすゝくとひはる

給て

建礼門院右京大夫

雲のうへにかはらぬ影も月の光をさてぬと思ひそせし

九条内大臣身まかりての比前大僧正慈鎮

のもとにつかはしける　後京極摂政太政大臣

とふかけとなりて昔の人なれよはの月はいかなと

返し

前大僧正慈鎮

いまはたゝのきを宿にすむ月は心をやりてとこしへにや

前大納言伊平身まかりて後よみ侍ける

前僧正實伊

あてまらむすゝめし月はいかにさやけさそ悲しかりけれ

後光厳院かくれさせ給ひける年の十月去

年のこのころに弘安十年のめされける

車をたにいそてそ子の日の野へにて

よみ侍りける初見恋

権大納言公時

木すゑをとこひそめぬ初河の定なき世の歌せしまに

母月はかりてみとせになりまけつゝに峯

桐典侍りとかつらし侍る

前中納言雅孝

雅家卿別と思いてしきふこみのりもふいかうしらそ

返し

後宇多院宰相典侍

たそ家卿ちまねをさとめやまふみのりそれ袖乃別れは

題しらす

源保經

出乃ねを鄙しん色冬寒乃きて八聲家乃惜る紅ら

六条院宣旨

去常なんと

世中は末をにらわ露乃月いりその宗をとよそにやみ

大江義重

草の家吹こすす風の末は露ゆまそてりゐち世務をか

西行法師

たゝみやわさふ命乃露消て聲へや誰と見ゆるらん

備正宗縁

鳥への煙れ末をあをやうかとらふ心あをさに

二品法親王守覚

なれゆけはとまるやはとむつきつゝねをのみなきて消ぬへし

瞻西上人身まかりけるに

従三位行能

まことの法の師なれはそ縄ひく人もあはれ行の悲しさ

寄夢無常といふことを

津守国冬

おとろかはすともいつまてたのむへき世の中は夢の浮橋

題しらす

民部卿邦省親王

世中とよるみる夢と思ふ身はいまそ行あはれぬらん

前大僧正公豪身まかりて侍けるはてのついてにしける

入道親王尊快

なかくはおもひつゝかはしと思ひこしさむつまもあはれ夢そ悲しき

返し

前大僧正公豪

うしとみしその秋は夢の行あやらそれなれやむかしとも

文永ある年まかりての佐久しくなき人ののこりひて侍りれは

卜部兼直

なかし世はあはとみしまに消し夢とみし人の悲しさ

貞和百首にてよみてたてまつりける時

正三位隆教

なさこそす衣のこゝろに落る世におもふらぬ月ならそ覚き

前大納言公泰

泣とへは袖そ露けき母ならて忍ふの昔は恋しけれ

八十にあまりける母におくれて

藤原秀茂

ことわりと思ふ中にかなしきは八十餘の老のわかれて

年比あひなれにける男の身まかりて後よめる

尼西蓮

別てはなかく物へこともなかりしにあまりはかなくら秋の月なり

女御徽子女王

月日こそおくれぬかれなき人の俤ほとそかはらさりけれ

後九條前内大臣家九首哥合に

前僧正實伊

ゆくと思ふ人は帰らてあはれなくかはれは数そふ人の面かけ

藤原伊長朝臣

老ふまていかその袖に帰らて秋の月をいつ世こそ見ん

世中つねなりともあはれなりけれは

和泉式部

ことしきく人はなくなる世中に我身と秋の月はやすまむ

おさなくてひろ人の身まかりにけるころに

といやらんはあちこちとかくれしとそ一ところに烟とやみぬ

去常れんと　大江廣秀

烟にあちこちもとほして旅なる人の命はそそはかなき

参議にをくられし父の墓所に詣りてよ

み侍りける　前参議雅有

うつゝの身にとまりあかぬ涙を苔の下にも露とをくらめ

もんうし山奥山といふ所に墳墓ありしあん

とそまうてんに詣りて読けり

中原師尚朝臣

こやはつねなきみをしふすもまた露けき苔の上哉

廣範院入道前太政大臣十三回の遠忌にあたり

墓所乃あるに詣りて御しにおもむきて

よはなほむかしをしのひ侍けるまゝとひつゝく

られ侍て　権中納言雅縁

松生の苔の松本をたつねれそて十とせ餘りはかなさん

普広院贈太政大臣身まかりて後左大臣従

一位をくられ給ふ色もすゝし延文四年等持院

贈太政大臣に於し宦位をくられ侍し時

寶篋院贈太政大臣ゆへきたしかまされ

をよみ侍けるすゝをおもひいそ侍く

前大僧正義運

住山し侍りし昔に人もろともにねんごろにかたらひし
源親行身まかりて後の遠忌に義詮すゝ
めて源氏物語の巻〳〵を題にて人〳〵によ
ませ侍ける時桐壺の巻の心を

前参議能清

限とていでしはけさにかへてもなかれし別はおしき

たなしとぞ横笛を

寂恵法師

笛のねをきくもうき世をすてゝ今ぞむかしに遊べやはてん

あつまよりともなひし妻のなりけるに女
身まかりにければもとへまかりて宇津の
山にて侍ける

藤原頼業

とりかへしたびはかなしき宇都の山こえても蔦を
みるぞかなしき

新續古今和歌集巻第十七

雑歌上

寶治二年百首歌めしける時歳中立春といふことを

前大納言為家

あさからぬ春は今しに年毛よそにしらて春風のふく
むしらす

藤原清輔朝臣

はらてかそむかしかれら瀬の糸も春にしらて知らぬ色なり

正三位成国

淺みとりかすむとみれは志賀の浦や神代の松に春はきにけり

廉範院入道前太政大臣家にて子日春哥
と

前参議雅有

春はやこえぬる穂もみよしのの山のかすみに春のかけ哉

百首歌中に

順徳院御製

鶴のすむ光のとかなるむ日と雲けふ今は春風そ
むしらす

前大僧正禅守

折ふしの波のうちも立かへり昔風をしらむ春の那

海辺といふことをよませ給ひける

後小松院御製

紀の海やゆらの湊の朝ほらけ霧の底より舟こくらしも

住吉社によみてたてまつりける歌の中に

四辻入道前大臣

住吉のおきつしほかせあひみえて霞にうかふあはち島山

宝篋院贈左大臣家にて人々三首歌よみ侍けるに海辺霞を

従三位雅家

春きてはあまもりけの烟まて霞乃浦の名にや立らん

新玉津島社歌合に浦霞

後醍醐院女蔵人万代

りはやく烟も遠く霞みて雲かとなひく浦の松かけ

春歌の中に

祝部成茂

冨士のねはそれともみえす田子の浦のりかね烟のみに霞て

源持賢

佐保姫の衣を誰かよそにみむここら浪よりかすみ霞か

嘉元百首歌たてまつりける時霞を

前中納言為相

またきより烟とこめて山もとの里あるかたはかすむなり

康安二年春比本情によみ侍て歌合しけるに竹間鶯といふことを

二品法親王覚誉

呉竹のそれ世乃春はよそなれと昔忘ぬうくひすの声

延文二年百首歌に若菜をよめる

前大納言實名

春日野や尋ねをとめはまのこわかなも我し年をへにけり

文保百首歌に

中宮大夫公宗母

浅みとり野への霞やまとふ葉の下もえ涌の縦なるらん

山ふかくとしみ絶けつは梅の花咲しるらそ

はらんして

後亀山院御製

山ふかく人そとひくるさそふとはいつまれかいはむ宿の梅かえ

匂しらす

従二位為方

あかりとてそよさむ梅花はなかうつ袖にうつる匂ひは

世をのかれて後梅薫袖といふことを

為継法師

色も香も遠きみの宿はにほふそ匂ふ梅か下臥

春雨を

鷹司院帥

なとも世し袖ぬらしせや春雨はふるハ涙と人のしらん

春雨の中に

紀行長

河岸の新緑水よりなひき浪のまにまに春柳かな

嘉元百首歌に春月を

前従三位為子

難波江やよふかきあしの光霧てやとる雲井の月

住吉社にまうりけるよ中に月みて

源経信

かはりにし雲井や昔の秋の月我身ひとつはまたすむかな

述懐を

中務卿宗尊親王

こゝろにはかなはぬ世中といふことにひて我身のみしらん

貞和百首哥に

前大納言實教

ちる花をはなそかつ雲越路まていかに鳥の思ふらん

題しらす

法印慶運

たちかへりゆくとも志らすみよしのゝあまのむれ鳥の雲別

藤原宗秀

めくりあはむ秋もやまたに契らん数の月よりかへる鳥

花のちゝはりのこゝろふにはてゝ行へ絶て

従二位氏久

うへおきしひとゝもしらす袁まれみさへん雲井の影楽

百首哥たてまつりし時落花

直明王

咲やらぬ花の梢は雲移れ松もなとやつまふかん

霞花とふゝみすと

僧正宋縁

世をいとふらんとも山のふかゝりそ花の奥の花やすむ人

新玉津嶋社哥合におなし心を

権律師則祐

そことなく山路の花の香に匂へる白雲とみやはさん

同社三十首哥に

妙藤法師

今はまた限りとも山櫻あかぬ心のおくはしられし

花哥乃中に

藤原為重朝臣

よしの山ひとをまてよ山櫻咲まてこそ雲かともみし

二月はかり小小侍従あつまよりのほりぬるに

出て法橋顕昭かもとより今はよし君まち

えたりくてこそ都乃花をみるともと有

見んなといひつかはしたりける返しに

小侍従

あひみむといそきし程を君はしらむものからや我を待けん

ゆきき路の色を勤くれ哥よみまゐらせ

花發風雨多といふ事を

頓阿法師

世中はかくこそ有けれ花盛山風吹て春雨そふる

尚歯會おこなひける所に侍るとてよめる

刑部卿頼輔

花みると追てまとはり春柳の糸よりよわき老の力ハ

百首歌中に　前大納言實房

忘れめや六代よつかへて春ことに雲ゐの花の付

式部大輔秀長

おらまむこえ越の花盛嵐のなせもときぬね春かれ

落花を　僧正實意

うらむさ風にしらそちる花の行ゑぬ別もしら我心かな

津守國博

ながめぬまも日数ふるふに花ちれは風まち後よ落やそふらん

花落をとて　能因法師

うき身をもなくさめはつるに桜花いかにせよとかはちるらん
散しらす　法印守遍

白浪のたつ田の山ハ春風よもちる花のなにそふれ

久安百首歌に　上西門院兵衛

桜花木のしたにハ吹あまてかすのつ柳にやちれみゆらん

後深草院御時石清水臨時祭の日さくら山吹なとみなみなにもうちひさるを御らんして歌よめと仰ことありけれハ

後深草院少将内侍

行水にうつる花の色々と我なしとは誰か見るらん

承久元年内裏歌合に鶯谷と云こ
とを　　藤原信実朝臣

谷川はゆくせもしらてねとかのふすに鶯そなく

寄木述懐と　　津守国助

春はあふくえとみるも歎かなさくぬ身にあふの江
人々に百首歌めされける時にすゝめとよ
ませ給ひける　　崇徳院御製

春そそさひしき宿の庭なれは独ともみる花そ咲ける
源顕氏朝臣

款冬を

芳野河やくも春れゆくかたに影さへうつる山吹の花

題しらす　　正三位道家女

花ちりて後ひさしき庭に立そへて影まてうつる春の藤浪

文保百首歌に　　前中納言実任

神もいかにみるらん杉の藤乃花老の浪まてかゝる契を

藤をよめる　　前関白太政大臣

春日山本あらぬ松にみてそきく神代の春とかゝる藤浪

応永六年三月興福寺金堂供養せら
れし時呪願つとめ侍るとてよろこひける

前大僧正道意寺

春日山みねにかゝる月のおもてと云海みつ山の落流

暮春といふことを　雅成親王

いつかりは待たるゝ人のならむなれ我こそ春の別を

法印慶運

とゝむへき別しなれはまてかたき人の花の春かな

延文二年百首歌に奉りし　前大僧正賢俊

おしみてわかるゝ袖の花染よいまそかへぬる衣かへ哉

永和百首歌に卯花

四辻入道前太政大臣

時しらぬ月とみれともやまさとの春をもよそに隔てける

時鳥歌の中に　祝部成賢

子規鳴かせまし夏山の峯よの底に山のはの月

文保百首歌に　後花山院内大臣

時鳥なれぬ人ともなりてそ見る若葉のよそに聞かな

前大納言為定

また人をよそに過さす時鳥まれにみつしらねと

杜鵑を　前中納言宗宣

時鳥なみのうさ月の詠めにも中なかに思ひ杜よたくらん

題しらす　祝部成久

たかつらの使こぬ夜を過ぬ時鳥月いかにしてたれの花の枝よ

よみ人しらず

ほのかにもつまこふらん子規あひみつゝさ初音をはね
ふなさへもきけとや時鳥まちぬにきこえたらん

夏歌の中に　従三位氏久

夕暮はなくねそなかる時鳥雲のよそにそ雅とふらん

千五百番歌合のうた　法橋顕昭

今はとていかなる山の時鳥忘れぬ一こゑもかな
年比こゆる井手待けるに五月雨もうち
ましりぬる人のりとよそになをたかきさ

猶まちなをといひ侍りけれは　周防内侍

そのまゝにつれなくもいひける数かさぬる月もやあやなし
読人しらず　嵯峨益久

神まつるみしろ田にいまもふみそめて乳呆(?)

夏草を　権中納言雅縁

名のみして遠草おいぬるまゝに夏草につけて雅かすさめん

永和百首歌に五月雨雲を
四辻入道前大臣

さみたれのそらにみてまよふ雲のまよひに我のみ月のみね

鵜川をよめる　大納言基名

あまた世にさらぬ舟さへおもひかたちしかゝり火の雑衆ぞ螢火を　伴周清

りうかはにおもひみつの螢火はわきてやもえぬ螢

應永十一年内裏にて人々題をさぐりて

三十首の歌よませられけるに沼螢　前大納言為尹

うき草のしけみにふかき沼水に影さへ見えてとぶ螢かな

弘安百首の歌に　法印憲實

忠ふそこころにあかし夜半の月を徒にあかさぬ袖かは

題しらず　よみ人不知

よろつ世てらすともしみぬ螢かいかに小男のこいぬらん

らへのたのこともしらず夏とさへりて許らまし

又附浦夏月を　權中納言雅世

あまてかくそらをまるなみのうへにみるあきもなくうつる雑月

不知心を　源資雅朝臣

秋せいさへらくりの浦にかたみ衣やとる雑おく月ていゆく

亀山殿の七百首の歌に小座羇旅を　侍従為親

おのさとそまた夕附日さすや須磨のやまとさして

百首歌めされけるついでに蓮をよませ給ひ
に　　崇光院御製

雨ふりて玉ちる露を蓮葉の花の光となりにけるかな

荷葉露水といふことを
前大納言親雅

ふくかせもむすともみれは蓮葉にこほれて涼しき庭のおも

年ふりたる松の陰よりいつみの涼しき
をむすひて　　出羽弁

えにふかき影のみならすあかしなるいつまてかあらん

樹陰納涼を
善節法師

日もさすならひは露のおき所なく秋涼し松の下陰
夏しらす　　法印仁果

なく蝉のこゑも涼しき夕暮に出てもうすき月のかけかな

蝉を
前関白太政大臣

雨はるゝ山の木末の夕風に涼しくなける蝉のもろ声
伯秀房

我のことはかなくや鳴らん空蝉のむなしき世とは誰もしるよ

正治二年百首歌に
二品法親王守覚

しけき山風吹もて涼しきは夏もなくて秋の日くらしの声

神主辞してのち社頭の六月祓を思ひて

従三位清久

みそきしや昔ハ我もせしかとも今ハ神をそいひ出ぬる

夏祓をよめる　祝部允仲

夕涼や秋をとなりにみそきする麻ふく波に風の涼しさ

立秋風といふことを

よみ人しらす

浅茅生乃露吹しの風そしられし人知らめや秋来ぬとも

題しらす　賀茂夏久

秋きぬと神も知るらんならの杜乃下風そとよむなる

千五百番歌合に　土御門内大臣

秋きぬとおもふのみか月乃光まてそらにてすみける影ハ志らなみ

建長三年九月十三夜影供歌合に山家松風　前右兵衛督教定

影ハなき木の下風ハ色そなれと秋やとふ山の風そ身にしむ

建保二年八月内裏歌合に秋述懐といふことを　大納言通具

ね覚してふしそかなしきひとり風もしらし秋も昔の秋ならぬ身よ

秋歌乃中に　西行法師

いふまとも見て家の雪ゆつハ萩のもとみても松乃中なる秋

源和氏

萩の葉に音信そむる秋風乃ふかぬ袖にも露そこほるゝ

百首哥よみてまつりける時萩を

前参議通敏

風ふかは露こそおもれ萩のうへに結はぬ花はいつてさかん

題しらす

権中納言重有

老らく比妹乃ね覚の長き夜よあえて寒き萩の風かな

七夕乃心を

民部卿資宣

七夕も秋とやかへる衣〳〵をへてうきてふいとのなかき身と

津守国量

七夕乃契しらせよ天川みなかはやかにかよふらん

後九条内大臣家百首哥合に

後深心院中納言

妹のよとこそともまつぬらん七夕つめやたのみしるらん

野径萩と

源基之

秋萩乃花すり衣打きれはゆくてにうつる野への夕露

題しらす

梅遠村

下葉まて色にほふ野への秋萩はちりあまりて露や染らん

女郎花とよめる

藤原道経

女郎花もの下紐打とけて誰とふしけん野へにほふらん

後小松院にて題をさくりて哥つかうまつりける
に稲妻と　　権中納言経成
影やとす雲ゐにそくいしらは見えぬ程もなき稲妻
秋の秋いねそてみくなりふし枕かしらお
かえけつゝ小萌のへてぬりられいもいゝ
けるとき　　よみ人しらす
袖の露もふりそふ秋や秋の夜はいとゝひとりぬる我袂
秋夜長〻云睡天不明といふことを
太宰大弐高遠
妹のよはなかきをしのはてさへいねぬよハ明ぬ枕にそなく

嵯峨のおくにすませ給ひける秋のころ
後亀山院御製
思やるへたにおもふ住なれぬるもの嵯峨の露ハいかにと
家百首哥に庭月と
康範院入道前太政大臣
色〻に千種の花は咲しかとそへてうつる庭の月かけ
後小松院にて題をさくりて五十首哥に
つかうまつりけるに月前露といふことを
勝定院贈太政大臣
風そよくえたの露も落ねて月にそ秋のやとりしらる

深山月を　　菅原雅明

みなれゆく月もさやけきみ山の松に志ぐれさきをと

石清水社にまうでける夜の中に有月

遠といふことを　　藤原公繼

蒼海か峯の松原かけのしも木間よりかゝる月ぞさやけき影しらす　　荒木田經顕

冬の夜を山月まさやけき鐘の音をひゞきにそふるよはの嵐　　梵燈法師

ほしの光もうすく浪のうへみ舟の山の嶺の月　　寶蜜法師

秋風の松吹音もうちひゞく神もいさやすみの尾の月

鹿苑院入道前太政大臣家百首哥に

海月　　權大僧都堯尋

舟よするまの浦浪たかくと月も秋浦にみちくるしほ

月照古橋といふことを

たゞ臣

よるも猶さぞらん橋の木やさしきとてや月のすみ渡らん

後深草院横川の安樂谷に御幸の次に

むかしつくへけるみかとおほせしとふるき跡に参りし侍る　　真縁上人

思ひやる雲ゐの月に面影も横川の水にすましてそみる

月は雲ゐの中に　後小松院御製

雲ゐより重ねし月のひかりをもみすてゝ出し今は何とも

正治二年百首哥に

小侍従

何ことに露も心の袖ほし月をかこちし世なりけれ

弘長百首哥奉りける時

後九条前内大臣

なきさへうつる人を思ふ世中にかはりて昔の月をみるかな

月乃入をとて

源有房

山のはにかゝる月をとゝめ置て行かくれぬ身ならましかは

題しらす　源光行

哀とも思ひ出ては思ひもよらしそ月乃光なりけり

藤原光俊朝臣

神さひていく世をへぬるあはれとはしらぬ山のはの月

貞永元年閏九月十三夜哥よみ侍りけるに卜部

兼直かりもとにつかはしける

長月の秋乃頃とてもまたありける秋の月かな

返し　卜部兼直

月乃影いつをも月と契りしを秋も晴ぬよのことなれ

應永十六年九月十三夜内裏にて人々題を
さくりて百首歌つかうまつりけるに寄月
往事を　後三條入道前太政大臣
昔みし雲井はかはらて我世の月そ忘られて
月卿の中に　多々良盛見
めくりあはむ事のみこそ月に契ても我世の名残をしそなき
見し世をしのひつゝ給ひぬると後小松院玉津嶋
社へ法楽歌奉とありて後いかにもちなと
ありてのちの月もさや庵出あへさき光の形
それより雲乃空にまかせてと作しまゐりける
法楽の中に　権中納言雅縁
今そしる霊光よ雲かくれ又月と照し月ともに
絶しらす　前大納言俊宣
とふやとみるまきあへさき山里に移おもかけて月なけれ
崇徳院志りく南山ふまかせ給けるに
九月十三夜新宮に給て都の月をとひや
つかくはに後八条入道前内大臣なりとしゆかつるに
しけつ　儀同三司　實
去月や月も更ぬる秋みてて有と秋たへつる見山への松
返し　後八条入道前内大臣

七月やうき世と照の月みくとやかてさかん山と思ふそ堂

月前鹿と　　津守国助

山のはに妻とふ鹿の声なくは秋や月なきみのかよひ

宗仲法師

なくて山の○立さしにかくれや月のおもかけさそふ声

朝鹿といふ事を　　源持基

なきあかす妻の涙の露やおきてはさらにしられ　悲

建保五年百首奉りに

前参議忠定

夕暮は秋のならひの鹿のねよ山とふきさそ嵐そこゆる

至徳元年七月七日仙洞にて七首歌講せられしついてに暮山鹿と

後円融院御製

時雨ゆく外山の雲にまよふ鹿の声もさひしや晴ぬ秋のゆふくれ

儀同三司資家にて題をさくりて哥よみ侍りし時田家鹿

權大納言資廣

秋の田のかりそめなからむすふ庵もなれていく秋風そさそふみ　声

擣衣を　　紀俊長卿

萩か花うつろふ比や夕日影のまかき照れもかん

藤原雅親

長月の在明の月に妹まくら吾宿におはのさ衣

藤原雅家

さ筵に霜を重てしく我りや衣うつ宇治のさと人

住吉社にたてまつりける百首の中に

正三位兼煕

橋姫のかたしき衣さもこそは待夜をたのむ宇治の川風

おきまよふもしらてそをかへく

藤原為忠朝臣

たとへさらぬもなけき松かえに夕霧まよふ天の橋立

寛元百首歌の中に霧

前大納言経継

さえやらぬ夕の空の秋霧にほのかにくるゝをかの松原

正治百首歌に

権大納言忠良

鶉なくけ野沢の霧のたえまより白鷺のとふの毛衣

鶉をよめる

源季広

ふるさとは吹夕風にさえまさりて野子の入野に鶉鳴也

燕子楼中霜月夜秋来只為一人長といふ

ことを

後京極摂政前太政大臣

独のみ月と霜とにおきあかしてやそれ世をしのやとるらん

題しらす

ふかき秋の窓打草におとつれは影ある松に秋風そふく

千五百番歌合に　源具親朝臣

露さゆる秋のすゑはの浅茅原虫のねよりそ枯そめぬらん

正治百首歌の中に　従二位家隆

嵐吹ころの下葉も枯しより山小河風ふかき夜

建仁元年八月十五夜撰歌合に　海邊

秋月　嘉陽門院越前

紀の国や秋さへ霜をおきそへて吹上の月の真砂のうへ

後鳥羽院御時おほせられしにたてまつりける

よみ人しらす

紫の雲ゐまてやは志られけんあめか下なる菊の露は

御遊し　圓融院御製

紫の雲にまかふ色なれや露にぬれつゝ秋そ立ふ

菅家万葉集歌

読人不知

ことの葉とおもひしものを秋風はいつれをかたのさかなる

山彩衆を　従三位雅宗

河島つる雲ととさて小倉山紅葉も時もふかさ苑哉

秋歌の中に　右大臣

深のこす限ハ松にて紅葉ならさき秋の山もと

題しらす　源教親

暮てゆく秋の別のなこりとや野原の草も冬かるらん

念阿法師

草の原露のミさをのつゆ消えはありとも秋や暮なん

九月尽を　土御門院御製

暮ふハ又雁ゆく暮の別そと虫の音絶ぬ秋のおしミ鳴

初冬の心を　従三位行文

霜さむき秋の時雨ハ冬さねと木とよりてやよそに見るらん

時雨といふ事を

ひと時雨もふらしかみのみ吉野の嵐の岩も

勝命法師

空くもりて時雨やふらん刈田の庵に雲そかゝれる

正治百首歌に　源師光

落葉を　前大僧正良瑜

時雨をもふりにしものゝ山風にかつちりさきあへぬ木の葉か

兼好法師

のこりなく花それ枯乃紅葉ハかつひとりかひとりかゝり

残菊をよめる　津守国基

秋宵の雑に菊といへる心を詠ませ給ひけるほと

弘安元年百首歌めされける次に

亀山院御製

やしとも霜にむすほれし京の日数の一秋二度に

色しらす

六条院宣旨

嵯峨の秋の山寺に風さえて霜よさよふる鐘の音也

正治二年十月歌合に枯野

刑部卿宗長

野への色はおさまりて霜よむすほれし枯葉より尾花

霜草を

法印慶運

冬日のゝ霜まにほのかに見えし草葉にそ霜よおきそふ道

行観法師

更ゆけは更そふ霜はみえわかて月まそさむし宇治の橋守

寒夜月のころ宇治よ渡りて

後京極摂政前太政大臣

秋のすゑにおける霜と光りそ庭の木葉にやとる月影

霜菊を

津守国量

霜をきく芦の枯葉は音ふけてさそふ風の音そかなしき

関路秋よといふ事を

よみ人しらす

まつら川ゆくや実とぬれなん衣そ世乃中もしやならは

千五百番哥合に

野宮左大臣

冬きてハ衣手寒し泉川千鳥なく也暁乃嵐

寛治百首に寄浮千鳥

前大納言忠信

思出るむかしも遠くなるみかたいかに浪よるく千鳥なく覧

題しらす

源経有朝臣

人志れぬあはれハみなく千鳥さへ夜半も絶えぬを世にはなきや

よみ人志らす

いり鳴こゑは浦のさよ間西ふけぬく妻やまつらん

津守国基

浦の夜ふくるには湊乃夕志ほに松原こえて千鳥鳴也

住吉社に海辺にて寒秋千鳥といふことを

よめる

よみ人しらす

おきつ風ふけてハいとゝ月影もさえまされは沖に千鳥鳴也

水鳥を

道誉法師

定なき世をうき鳥ハみなれて下やすからぬ思ひなりけり

三善資連

秋乃霜ハはらひねても水鳥ハうき寝ひとつや猶さへ鳴らん

冬哥の中に　権大納言資藤

いと様しさゆる夜よに池の氷のゆるきてすむもみは
羽見水鳥とふことく

二品法親王守覚

あさおきもえん頃く契遠て宿にわかるゝ池の水鳥

後京極摂政家百首哥合に椎柴

中宮大夫家房

み山へとふみ見し道ハ椎柴のまよひにて玉霰ふる

待雪と云ことを

僧正禅信

時雨けり外山の松の色よりもふらぬ雪けの雲そ遠かき

冬哥の中に　藤原雅朝

神な月ふりしく雪ハ消て時雨よりくるそらの浮雲

永享四年内裏哥合に初雪

大納言俊信

めつらしくけさふりそむる雪をとて尋しそ宿にしら
驚しらす

中務卿宗尊親王

秋の月世よとしけりし跡もなし昔にかへる庭の白雪

應永十四年内裏三首哥合に浦雪

前大納言為定女

わかの浦や老木の松にふる雪のつもりてもしそかさなる

権大納言経豊

あま人の衣かはくまのとも白露につゆかさねたる袖のうら浪

嘉應二年廣田社歌合に社頭雪

寂念法師

ふる雪にとはれし世やおもふらん志らゆふかくと見ゆる榊も
見しらず

権律師仙覚

花ならぬ梢をゆらしほとなくて雲ふくみねのみよしのゝ山

従三位猶久

梢のみかすむとをしに見せ神山の雪ともふる枝の松の白雪

宗尊親王伏見に侍し比雪朝にと家

雑とつもらぬすなほなる世をせし代々の
むかしにかへる道をしる君を
神やまもると悦しきかな

今上御製

みつ世代のあとはこたへてそれる山の雲の跡をたえ

鷹狩を

参議家教

老ふるを又河まの河浪立けり昔のなをしはしりそして

正治百首歌に

鴨長明

又ある日は三世の仏の数をかぬ大宮人のなれをとぞしられ

冬部中に

後鳥羽院御製

一とせも今は末野の村霧て秋はの風の色けき

藤原則俊朝臣よりとより今は老の身に
あられ侍よしにて作るよしつかはしける
くれはとひくつりかりをいとひやかせんと
きけるをりに　藤原秀茂

今はなそしひ知らん年とひてつもるは老の心なそさと

菜蕎乃心を　前大納言季顕

何かせんありて深山の奥の草むらむは人のなきひのあれ

題しらす　中務

わくらはにかぬるかねをいふかれは春にもあそて年ふりなん

清輔朝臣

あらなくてとしもふるに数まさり春にけりか
我よそひけり

新續古今和歌集巻第十八

雑哥中

建仁元年二月後鳥羽院に五十首哥たてまつりし時　参議雅経

浪の上をなかめは限ありけりと心のはてそしられさりける

後宇多院に十首哥めされけるに海眺望を　弾正尹忠房親王

ちるて日はうらくもみちもせは沖に数そふあまの釣舟

権中納言公雄

限なき浪ちの末はひとつにて空にうかへる蜑の釣舟

題しらす　前右兵衛督基親

難波かた入江の芦はしかれて松のこすゑに浦風そふく

眺望のこゝろを　後[illegible]院入道内大臣

入日さすかせの浪路の末みれはひとつにちかき浦の初嶋

貞和百首哥に　前大納言實敎

おさまれる世は吹風も海かせもくりかへす絲の末そ遠つゝけ

題不知　如願法師

蜑のすむさとやいつくとなかむれは霞はしらぬ入江にうかふ

嘉應二年廣田社哥合に海上眺望　皇太后宮大夫俊成

よるの浦漕ぎゆくあまの舟路にも心をそへてつなぐさゝれ

家百首歌に浦舟を

康範法入道前太政大臣

風もやゝ磯への志ぶきちとゆく舟は浦路をへてとまりなん

太神宮にたてまつりける歌の中に眺望遠帆

源持康卿

浦風のくもはらしもみえてまた浪ちにてらす蜑の釣舟

鴻鶴といふ事を

祝部成胤

あしたつの志ほ風さむき浪間に声なきかけて立さわく浦

弘安百首歌に

従二位為子

瀬とゝもにあまりてこゆる瀧川の岩にくたけてちる白玉

嘉元百首歌に松山

後九条前内大臣

雲のゐる梢もひくしたかしまのみねの松山いく世へぬらん

貞和百首歌奉りけるに

前中納言為忠

家末ひくきをともしる空のやまかけの高ねの雲にみえぬる松山

弘安元年百首歌めされけるついでに

亀山院御製

たゝしおもみのひかりの秋のさやけさにかゝる雲のなかりけん

天象暮山遠といふことを

大江千里

天津風ふきしくれつゝみしはゝ葛城山のきえやせり

題しらす　平常縁

夕日さし山のはなかに雲かゝるそらは秋の一むら

永和百首哥に　深守法親王

高砂の松とゝもに世にふりぬとはおもむてふ露やかゝりてしらん

三十首哥によみ侍けるの中に松を

式部卿邦省親王家中将

住吉の松のしつえの奥の浪かくる心を我とはしらまし

題しらす　惟宗行綱

年ふりて昔もしらぬ岸の松みとりの色そかはらさりける

家百首哥に磯巌といふことを

普光院入道前太政大臣

よるへなき磯打浪にあらはれていはほの苔もむしそしまし

雑哥の中に　後八条入道内大臣

雲の浪煙の浪もみえわかすしほやく浦の夕暮の空

百首哥よみてたてまつりし時山家

前摂政左大臣

我宿は名をもわしのなしきにまかせてもみられけり

弘安百首哥めされける次に

亀山院御製

都にて空にはのみよふ深雲の都の山の花にかくれて

二品法親王覚助

定なきやみしん山里とさしゝとはてはみえける松は

洞庭古松といふ事を

前大僧正道意寺

住なれて我もふりぬる草庵によりぬる老木の松ぞしりける

嘉元百首哥奉りける時 山家

中納言為藤

住わびと思ひける我山里はとふ人もそのあとみかねて

述懐の心を

前大僧正賢俊

山里にさひしさにこそまちかねの浮世といひて過しきつらん

百首哥奉りし時

左大臣

うきうきの身とて住むに世の宿は門にもとも雅らひ

右大将公名

住わびと思ひそめぬる奥山のいはきさへ今までても

永和百首哥に

後常盤井前右大臣

山のさとみなれもいまは人に杉竹のこゝろやとくらな

山家水を　栄仁親王

このまゝにとはゝすむへき山かけよ深き世の葉にまくらはなるとも

弘安百首歌に　入道二品親王性助

さひしさを何にこゝろのなれそめて身をかくしてし山の里

題しらす　源義忠朝臣

住なるゝ人の心はしらねともなとそさひしき山のかけかな

堯尋上人

そむかてはかくはさらにせんかたなけれはこそすむ山里に心なき世を

家に五十首歌よみ侍ける時月

式部卿邦省親王

山ふかき人こそあらめ此里は月にいくたひすまれぬるかな

貞和百首歌に　宣光門院新右衛門督

ときおへよそほすらむかねはあはれよその月をとふ人すくなき山の奥まて

前大納言重資

庭の松めくりて竹をうゑさせて風のこゑなき山のいほり

中務卿宗尊親王家百首歌に　前右兵衛督教定

小倉山住は昔ときこえしはあはれなる哉秋も松風そふく

山家を　浄阿上人

のかれこしみ山の庵やなかなかにさひしからすハ浮世ならまし

よみ人しらす

いつはせん山本の庵のしはしとてよそに見し世の月さへそなき

題しらす

源済元朝臣

苦ふかき煙の一すちに思ひなるゝ浮世とそ見る

明魏法師

立のほる煙よしはし山かけにすむ人の心をそさは

山家煙といふ事を

入道一品親王永助

みすからは山本乃庵の夕煙世にふるあとをよそにしらるゝ

いとくしかくかくよみ侍けるに同し心を

前大僧正義運

山里の煙の末をなかむれはあはれやまた末たえしとも世に

正治百首歌たてまつりける時

小侍従

あさゆふの煙りと何しふしくへ人はかよはせぬ大原の里

建保百首歌に

前大納言雅言

志賀さゝなみの山もとの夕煙なれそめくやよそにたえなん

貞和二年百首歌奉りける時

前左兵衛督直義

志ほ木こく熊のゝとを當初て山りく者き庵作りき

二品法親王覚誉

のかれこそ人めといとふ身をあまりさひしき山乃奥かな

四辻入道おたたる宿にて山家松を

参議季平

のかれこし山ふかけハ松風も浮世よりうき山の松かな

宝治百首中に山家嵐

大宰権帥為経

住つくもあハすまふて山里に志めてそ嵐のをとをきかな

住吉社哥合に山家を

足引の山ふかきおしあけて松の入ぬ種よ月そおほつ

如願法師

正治百首中に

前大納言忠良

同人山家乃苔に詠して並ぶ来よ世をそよもや

二條院讃岐

数出くるふしハ山よ松のおもきる苔の路

あるしなそれよ

前大僧正義運

世をいとひむかしの苔の衣こそ我よつけせぬわか

山家を

栄子内親王

山ふかくすむかひも猶のかなしさは浮世のかよひつくなん

題しらす　中務卿宗尊親王

山ふかくすまむとはかなきを我たにとしけき世をそれにさりけり

貞和百首哥に　等持院贈左大臣

やまふかくいりてそ世のためにおもひそむきもえぬ浮身なりけり

入道贈一品親王尊円

心こそ猶もすみえぬ山里に身をうくさよとおもふとはいへ

前大納言公泰

尋きて又ふかくすむ我住わすれむ山の岩かけに

正治百首哥たてまつりける時　後京極摂政太政大臣

しをりせし独かこしかく山の奥里に松風の庭にふくらん

題しらす　正三位義重

山里はつま木こるをのゝ音はかりかよひなれたる岩かけの道

寂真法師

山の井のあさきの水は浅けれとおもてにうつる峯の高根

山家水といふことを　権大僧都尭尋

よそにてはふかくてとも山の井のすみよからぬに誰やむすはん

寛治百首哥よみ侍し心を

鷹司院按察

よしや人の心とゝめてとふまとも山のおくにはすみかへらん

題しらす

後嵯峨院御製

あはれなり籬の苔はふるみちもたえぬるさとをなかめやるらん

後押小路前内大臣

山里は人のかよひし苔むしてゆきゝて掃ふ庭そたえぬる
苔と

前大納言為家（遠イ）

思ひいるいほりの中は苔衣捨てしうき世をつらけれ
山家友といふとも人を恨けり

後小松院御製

捨ふく思ひもいかに山里は友ともよふる世をやぬるらん
あつまとを河とふなるすみそめけるはよみ給
けり

栄仁親王

あまのかくれのまはそれかはらぬよしやしみ深の袖

題しらす

刑部卿範慈

浮世をも峯の白雲へたてゝは猶山里を捨そかねぬ

陵阿法師

てふかく世にはうきとや山里に住てそねつゝさならめかん

貞和百首に

入道前一品親王尊円

いとゝに世をのかれまは山里をさひしき物と松風そふく

正治二年百首哥めしてたてまつりけるに

三條入道左大臣

をのへより松の梢にをとつれて門田のいなば風そよぐ也

百首御哥の中に　　後小松院御製

豊なる山田の庵にかゝる火の煙や民の枕とひなん

永和百首哥に　　後報恩院入道前関白左大臣

志つかなる門田の庵の笘ひさし久しくなりぬ秋まつまで

田家雨と　　法橋俊業

ふるさとの刈田の庵のねさめにも秋そ世にふる雨をきく哉

題しらず　　よみ人しらず

秋の田にいなおほせ鳥もなれはまりかりほの庵にとりかとせまに

前大僧正果守

濃田の庵りかりやおまれともかりそめならぬ宿さためけん

百首哥めしてまつりし時田家

前摂政左大臣

小山田のもる身をなしかねてもおもひいり庵つくる時そこひしき

住吉社によみてたてまつりける哥に述懐と

前大僧正尊雲

いく世をもおもひし今かと思はなかりの老のうきを見つらん

守覚法親王家哥合に

法橋顕昭

しつみにし遠き神よはさもやうきはおつるともたえぬ涙と

題しらす　源経氏

わかれにしおもはましよそにおもひし人さき我行末のいそかるゝかな

保安百首哥に　右衛門督有仁内大臣

いとふへき浮世に我やとゝまりてさきに人をも山にすまねらん

述懐の心をよませ給ける　今上御製

峯鶴の夜あるゝ代にはよ人に知らるゝこゑん後をも思

述懐依人とよふすと

成恵寺関白前太大臣

五十あまりをゆく代につかへしといいそてこゝのへの庭をまし

題しらす　よみ人しらす

見る人の心のうちをしらねは今を昔の和哥のうら松

永和百首哥に　従二位雅家

りくそとみしてもまほしとあるやうれはゝのかた雲

百首哥奉りし時述懐　左大臣

立かへりわか思そそすかはりつのいてそしらん

嘉元百首哥たてまつりけるに

前大納言経継

立かへりすゝふりにけりいそちあまりわかの浦浪

江葦と　　入道一品親王永助

ことのはの玉江の芦の代々まてもいかてよなみなかれをせきとめけるや

百首歌よみてたてまつりし時述懐

権中納言雅世

うきて身にかゝるはよはすかたの代々の跡にもたえぬ道の浦浪

弘安元年百首歌奉り

大蔵卿隆博

わかのうらやふりぬる代々の跡とてもしらぬ我にもしるへせよかし

色しらす　　三善為種

なをさそよわかの浦浪代々の跡とみるにもなけきそへて

後光厳院御時頓阿法しこのみちにたつさはりて

ゆくすゑをかへりみてしゐてさゝせ給ひしまゝて

いさゝかおほせことありけるをむくひされは歎息

のよしきこしめしてへおほすとてよみてつかはし

けり　　後福光園摂政前太政大臣

勅なれはこの道に捨て数ならぬ身をはなきさにおもふことを

返し　　頓阿法し

雲かゝりておほえけるかなわかの浦の芦への鶴のねをもそへぬる

百首哥よみてたてまつりし時浦鶴

わかの浦や雲ゐのよそになれそめて若まつかへりの跡をわするな
鶴しらす

従三位行文

わかの浦は藻よつきまとやさこそみんかひも浪まによる家の風

貞和の比新後撰集よりこのかた風雅集
まていりて五代の撰集にあひて名をとけ
給ひける事をおもひてよみ侍ける

前中納言雅孝

わかの浦に身は七十の老の波かさなるひおもしれなをそ思ひつゝ
これも新拾遺集えらひはしめられける

時続千載集より五代の集にあひ侍る
事をおもひて

頓阿法師

玉津嶋入江に出るあま小舟五たひあひぬ猶やかへらん

寄舟述懐といふ事を

藤原秀茂

わかのうらや風をたよりに出る舟も身を出しかねぬ蜑の綱舟

住吉社にたてまつりける哥の中に

四辻入道前太政大臣

若嶋や山としたかくなるまてに積るとしぬ身を歎つゝ

後拾遺抄奏覧の時そへてたてまつりける哥

権中納言通俊

君をこそひさしかれとはいはへの世にみなしこひろかへ人のまさ

返しせよとおほせことありけれは

禎子内親王家摂津

君つゝきおつめむことをなからちりくはやさま返

又

権中納言通俊

君みよとおれるつゆのたまつさと思ふも風のけしきかな

駿河守にて侍けるに御家をつかひて権中納言

雅縁りもにつかはして判詞書しけり侍へき

よし中務とうさくつかへまつりてよしお

しかわかれなから流るめとるまは風のつてにへ

思さらり侍しとやうらりけるをとこに

源範政朝臣

よしあしと見わけいかさたむへき草のかひやなき

源氏揚名介の事を忠守朝臣よ

らへ侍とて中ませりけれ

菅原雅朝朝臣

流へかく侍るもあやふみの宿はありてんと見えたるを

返し

丹波忠守朝臣

ふさてふまれわかりつくへきてあらさるまぬ女色の宿

題しらず　　法橋敬昭

今さらにおもはすなりし鏡かなれいはまつひをもとえそひ[illegible]

述懐の心を　　前大僧正道玄

我身のミ志つミやそなたへ[illegible]おさめ志なおしの世中

世語に捨といふるをと

心海上人

世中を捨そとぬくは知らておもふきに我身待つれ

治承二年神主重保よみ侍ける賀茂社

歌合に　　前大納言隆季

とふくに浮世を捨と知らかさてもいきぬ我やゆかむ

正三位季経

浮世にはそこはみなくれともなとやそてまでふかみの[illegible]

秦織に侍りける時守覚法親王家五十首

歌に述懐　　前大納言兼宗

のかれ入さなもとゝ思へは住山ましぬりとなる我身なりけり

打る心を　　従二位有世

いのりこしそのめくみは住の山代ゝにもこえてのかれぬや

貞和百首に　　後福光園摂政前太政大臣

なからへて身にそへ侍りにつもあれはいまそぬか[illegible]

百首の歌奉りし時

前摂政左大臣

人みなに世をやすかれといのむさか川のなかれもしつかなるよに

後三条入道前太政大臣女

ふるきをもすてぬ世なれはいつまてもかはらぬよゝに命なりけり

永和百首歌に　　後深心院関白前左大臣

いにしへをしのふとみれはなかなからそかなしかりける

拾遺逢昔といふ事を

よみ人しらす

みちのくの花の跡をそ昔人の筆のあとにはしのふ

代々の家のことゝて今もしらるゝかな

なをけふの次によめる

小槻兼治

法のみちたえすそつたへし代々をへて今もたゝしきことの葉

貞和百首歌に　　民部卿為明

志きし川うつる市人をとゝめむさき世をとふ人はありやと

僧正のそのみやにて年月をおくりける法名

あとを聞ふるく人々よみ侍りけるに末の

後を　　前大僧正玄円

身をうけし法の末々もわするなよこの折ならぬ世をしのはん

聞しらす　　雄運法師

芳野川しやとしらすは世をもすてゝこそ又流るれ

源光正

いかに身とは数にもあらぬみなから世のうきことにおもひて見ん

述懐哥中に

源和氏

なをたのむや我をもしらてうねんのうきて此世をすてかぬるかな

中務卿宗尊親王家三百六十首哥に

月前述懐

藤原時朝

在明の月よりもわつらはゝ浮世を出ぬ我身なりけり

貞和百首哥に

中務大輔正宗母

とふらふにゝたかみのをおもふゆゑありかたき世をすてかさむ

題しらす

式子内親王

これも又ありてなき世とおもふをそうき我身にはなけきそふらん

前大僧正果守

ありて世にそむかはうらもありと思ひまて身をおきてまし

惟宗行範

猶しなれはつくは山にかへりむ身の数ならぬに残りまつ世を

弘安百首哥に

よみ人しらす

昔にはこの小歌のうれしかりたのしかりし世の

述懐を

祝部成茂

世をすつる身はあらしはてゝ我君よつらき数とならさ

題しらす　　　　よみ人不知

身ひとつにうき浮世と思ひしに歎くあまりぬるなりけれ

前大僧正道瑜よみ侍りける千首歌の中に　　　法印長舜

大かたの世のならひとそなくさめて我身ひとつのうさを思ひなけ

延文百首歌に　　　法印憲實

いつはりと道ほとまほし結ひとの浮身にも知るわ世なりけり

題不知　　　権大納言公時

浮世とは思ひ知てもそむきえぬ我心をや猶いとはまし

津守国道

うかれ世の身をありのみにそむくとも中々となりけれ

文保百首歌に　　　前権僧正雲雅

浮は身をむつひとて大かたの世のならひともおもひならはむ

大僧正道順

うれしともおもひもあへぬ同し世に命いつまてすまむ松かな

住吉社によみてまつりける歌の中に　　後普園院入道関白前左大臣

昔思ふ浪の玉もの露けさも月みるなかき猶そ志らるる

老後述懐といふことを

前大僧正定助

つれなくも今は何をかまつ山やかはらぬ老の浪をかさねて

越しらす　明魏法師

惜しなくて齢は老ぬ高砂の松も我身とたれかいはまし

源頼豊

いつはり思ひしまゝに夢にさへ見えくるともしらぬ昔なりけり

聖運法師

老の身はなかなかひとしく思ふ身のなきこそ思ひき昔なりけり

貞和百首歌に　徽安門院一条

めくりあはんとしもしらぬ年月のつもりてこそ長きなりけれ

弘安百首歌たてまつりける時　前大僧正隆弁

立よりて又見る鏡山きよからぬ老の影をかけて

八十にあまりてよみ侍りける　平師氏

玉の緒のあはれいかになるらん今はたのまぬ何に逢はむ

懐旧の心を　左兵衛督基氏

ながらへて昔の夢をたのみぬ世のなかに今はよるべん

宗顕法師

夢の世は又思ふ空蝉のうつゝともなく迄むかしを

貞和百首歌に　永福門院大蔵卿

はかなくも世々の昔を思出て秋の月にやねをなくらむ

懐旧を　三善為春

なにとなく世の思出もなくてふる身にも昔をしのふ　よみ人しらす

昔よりものはかなしき老の涙やはものをおもひならむ

貞治[?]右大臣家にて百番歌合し侍ける時述懐　前大僧正増瑜

これまても老そ悲しきいはゝいへ身の行末をたのみしかとも

雑中懐旧といふことを　平貞秀

いにしへをしのふは月にありけり宮守の[?]の[?]にも

思ひしらす　従三位俊長

られぬる昔といへは思ふも老いのならひなるらん

弘長百首歌に　衣笠前内大臣

いそちは思ふ心の浅からん身をもあはれとおもひしるらん

[?]よみてまつりける歌の中に　源経信

思ふへき昔も身にはなかりけり何をとゝめか涙なるらん　前大僧正道基

かへらぬ昔を何しのぶらん世のことわりに物思ひして

弘安百首歌たてまつりける時

前僧正實伊

老か身は又立かへりそれとそむきにし世よりのこして
夢を

式部大輔季長

思ひねは涙とともにさめいでてさめぬ昔の夢にかへらん

題しらず

式部卿邦省親王

なほ遠き世のためにと思ふいまへのみえつゝ夢を誰にかたらん

貞和百首よめされける次に

花園院御製

何ことも思ひしらでそ衰ふるむかしをおもふ
夢の世なれと

新續古今和歌集巻第十九

雑歌下

貞和二年百首歌たてまつりける時

等持院贈左大臣

うきことを今行末のためしともおもひのこさぬ嘆乃そ
思しらす

左近中将公衡

時のみし夢かとそおもふね覚して昔をとふあかつきの風

経若法によみてたてまつりける歌の中に

入道一品親王尊道

山寺の入あひのかねも老らくのね覚悲しき夜乃暮哉

稀岩院入道内大臣

明渡るよ河の瀬に落て雲井や入あひの峯そ寒き

延文百首歌に

式乾門院御匣

山のはにまさりける月もいれハ明るもおしき鐘の音哉

新玉津嶋社二十首歌に

法印経賢

かそへくハ字月ならて覚えて思つきせぬ夜の暮れ
思しらす

正三位兼煕

行末をおもふね覚の雲そへくさすかあはれ孫の音哉

源義将朝臣

はふさへ侍しもねたさわかれていまそ聞鐘の音

法印能経

月をおもひ出しけきね覚にそ傍ぬ暁との鴫の羽かき

二品法親王道助家の五十首哥に

法印寿清

夜ふかくとわかれし後の老のね覚よそ暁ふかく鳥そ待まつ

宝治百首哥に　暁鶏

常盤井入道前太政大臣

いましくはちかきね覚の牀の上に八声の鳥の数をかそふる

位におはしましける時百首哥の中に

暁寝覚といふ事をよませ給ける

後小松院御製

この比は鳥のつらさも待出て我とおきゐて暁の空

百首哥めしてさふらひし時

前参議道敏

鳥のねにおきわかるゝ程は徒よめくみの外も思ひしを

二品法親王覚誉家にて哥合し侍し時に

法眼源意

老か身はね覚におきゐつゝ涙そはしてやよふかき鳥の鳴らん

聞しらす

前大僧正禅守

時こそあれ友なきは暁とわきてやなかれねとそおもほゆ

賀茂雅久

暁の老の寝覚にたえて聞は付鳥も殊更やそふらん

梅元吉

鳴初をつくるのしらへきこえ里まても鳴ねまそしらるゝ

梅遠村

清見かたしはし舟を関戸の鳴かをなかれねやしらん

暁鶏と

入道前内大臣

今は我人のやよ小かゝる暁につけて鳴ねは数と

弘長元年百首歌なり

従二位行家

あかつきの子をとこにや鳴ねの鳴声して暁ふくるはなや鳴らん

正治百首歌に

式子内親王

なくきよの思ふんはしらね思ふなれ数へて有まは佗れ

百首歌よみてまつりし時浦鶏

権中納言雅世

いかにせん我世に老かゝりてそ子をとふ鶏の声をなかきこと

をなし鶏とゝふ事を

法印慶運

なく鳥のみち佛よへとはわか鳴情をよる鳴つるやをのかなき

守覚法親王家の五十首歌よ眺望を

源師光

なかめやる衣てさむくふる雪に夕やみしらぬ山のはの月

文保百首歌に　弾正尹忠房親王

出る日の光や雪に匂ふらん峯より晴る天のかく山

弘安百首歌たてまつりける時

花山院前内大臣

をちかたの雲井に晴て月あかき嵐の末の衣そさゆる

延文二年百首歌の中に夜燈

権中納言為重

うきことも光やそふとかゝけてもまたまほろなる窓の灯

同百首歌に小庭竹を

権大納言為遠

呉竹のすゑこす風の音にまた窓の外をもしらるゝ庭

竹為師といふことを

後小松院御製

こゝのへや庭の河竹いくたひか代々の跡ある色そそふらん

禁中竹を

権中納言雅縁

昔たにふしをさそ世川竹の三代よはひある身そおもひしる

百首歌奉りし時

二品法親王道助

代々の末葉なりとも呉竹のそのみなもとはかはらすもかな

永和百首歌に　崇賢門院

風そよく庭の呉竹よるよるも世々のよふかき葉なきをと
窓竹とふかすくもとまた世なりけり

崇光院御製

なよ竹の窓ふきならす呉竹の伏見にかよふ秋風そさん

同じく　八條入道前内大臣

三年すみ伏見の里のなかくしてみかきのもれ竹かれ下に

弘長百首歌に竹

前大納言為氏

呉竹の月なきよはのすくなるを世にかへるとそ思ひしらす

後押小路内大臣

うきふしの忘れけき月あらはるゝみなくひとよを窓の呉竹

前大僧正禅守

呉竹の葉末にそよく露や世にあはれなきさへしき波かな

後一条前関白太政大臣家にて旅乃心を
よめる

源兼氏朝臣

家門いやまさり人の後までそ家の歌はあまたしらめなん

貞和百首歌に

後三条前内大臣

行く浪や志可の浜松枝かはしてちきる都のしるしみえけり

百首哥よみてたてまつりし時

二品親王

伏見山昔にかはるみゆきしてあはれまつきく代の跡そと

権大納言資藤

立かへり浪の古ゑも数しらぬ袖ぬらすらん

弘安百首哥に

権中納言為藤

汲みてさすかたへぬ雲の梅井に志る影をうつれ

後小松院にて人々題をさくりて五十首

哥つかうまつりけるに蕭寺月と

入道一品親王永助

松の風やならしの岡のふりにける都の月を影りをまつ

古寺鐘と

権大納言通守

さえてあかつきほとりそふの日をもかきるのあかの鐘

柏秀房

徒よは世をさそや初も山鐘の音にもおとろかぬ身を

日吉社によみてたてまつりし哥の中に

権中納言雅世

見わたしに鐘のね高くひえよりも雲をさかなる里もしらす

後八条入道前内大臣

日にみかき月にそてらす白玉の乱てなかる布引の瀧

布引の瀧を　藤原基隆

清の出して田の川の名は今こそかゝる布引の瀧

名所述懐といふ事を

藤原隆祐朝臣

この世にはなれしとて長柄川すみえぬ身にそ橋の名をお

嘉元百首歌に　橋

萬秋門院

かくて世にふるなからの橋須来をも君をそたのみわたらん

弘長元年百首歌の中にたなし心を

前大納言為家

世をうしと河の二の橋をしもこえてわたらぬ昔をわけて今こそ見る

推史をよめる

丹波忠守朝臣

きつきも河の深いみてわたそてつまにかまかは家山もこゝ遠

世路山河険といふ事を

推賢上人

岩くれ雲河をも渡る人心けさきき世にかゝるもちを渡る

家百首歌に上陽人を

藤原為忠朝臣

徒に六年の春をすくしぬる夢の鶯も恋ひかへして

反魂香のこゝろをよめる

従二位行能

みしよの秋の月をとゝこうせ河のまに煙の内にそあはれをしけ

陵園妾

前中納言為秀

とらはるゝ松のとほそに光とてたのむもかなし菊の露

屈原

二品法親王覚誉

露霜にあへて色そふ秋山のふりにし松そ独さめける

四皓

源葉清

数ならぬ月を商山に入しかと又おさまれる世にそ出ける

白河殿七百首哥 小隠士出山

前大納言経任

みちありと我君か代に出てそ山のおくに住へをも遁

仙家の心を

源詮政

山ふかく水のなかれを尋てそ此世の外の宿をもみし

中務卿宗尊親王

浮身とはおもひなそそ三代まて心こし玉を河に沈め

歌合し侍る次に前大僧正慈鎮もとに
よみてつかはしける

後京極摂政前太政大臣

わかの浦の契もふかしもしほ草しつまむ世々をもとくへとそ思ふ

返し

前大僧正慈鎮

山河のなかれと契るこゝろは世をはなるともなかにかはらし（まん）
雲ゐのそらをはなれ世中へかくれておもひを
よは心なんに山さとにすまうしんとてかくこそ
とおりしもてめしけるとていかなるん世までもさ
えならまほしさよしといひなる人のとふことのはに
かさつきて侍

建礼門院右京大夫

なかれてもたのみしともに蓬生のさなきにあらぬ絵の悲さ
かちそこなひてうしらおもひしかとしきか
はた猶かりけにやつかりけり

刑部卿花義

なる影しらの雲は消そそたるつふに秋の露の命よ

返し　殷富門院大輔

ちるそてあは年月ふる雪そつもる如は雪は消てもそこに
秋ふる影まそて月をけらんして

後亀山院御製

見るうしにかりけめかる心ともしすらはかり月の影

建保四年内裏十首歌合に　八条院高倉

いかにならん世をもいてて契せん限もしらぬ月の光よ

月歌中に　法印浄弁

澄月も契ありとや宿るらん波にうつらぬ池の月かけ

題しらす　藤原隆祐朝臣

なかめてそ久しくなりぬ天の原むかしとそおもふ雲の上の月

雅経家歌中に　土御門院御製

清よこそ人の宿をおもへさりし夜はなかりしも月のかけかな

弘長百首歌に夏を

常盤井入道前太政大臣

わかやとに百とせ過ぬとりも夏くれはふるそ鳴かけり

嘉元百首歌の中に心を

前中納言雅孝

たのまるゝ物とは忘れて枕にとりぬ夏衣

弘安百首歌よ　前大納言為兼

まちわひる夢をうつゝと思ふそは雑の人なれ

題しらす　源頼之朝臣

はかなしや夏をはいさすかくれみるか水のかけとなるらん

雑歌

藤の心をよめるうた

大納言経任

なつの月の月はさらになかゆけは心をそへり

これはた雄山をもゆきみるとなかめは

まかせふる　はるのさかりに　なりへとも　やそうち人は
みちとせに　みちて後は　こたへゆきて　おまへ周まて
なりふくり　これやむかし　このたに　のこまつみちと
きくかへは　神のとねまて　みかはえ乃　はれおかいて
まつけとも　我をとことを　とらめしや　こひてゆきは
いてまやま　ぬりての里と　みちそせて　本との梢も
たつさて　いかれみせる　ふきさみかり　三人かまは
家ねむる　芦の丸屋の　流まてるき　こひも三すす
為そこ乃　そてかせ小萩を　おもかし　簾のかくねを
こてなりし　むかしをしを　いつくし　わすれいらを

なきとさけ　かりてみふ　うけみまて　をもなおきれと
いひそこさし　人をうして　なりかえて　はかなかりをとそ
あきさあつを　そてて晩かか　長き夜を　いてはせんと
そりなき　一夜かりを　たちきりから　草のまへてを
ますかけた　みなとを　なかめて　秋の末つきれ
ぬりしとあつれ

百首歌の中に独述懐といふことを

世をしけつ　後小松院御製

あきつもの　もとうみ　さらめ匡　やまと三筋の
そのまとと　なりへいひさふ　てらつまて　はきみかく山

いつの日乃をこやとしかくとなくそれてさやまれ
神代よりみもすそ川のなかれそめてとこよにこゝね
いすゝ川なかれはきよくぬるまことこの身たゝせを
空のうへ乃かゝとはさむるひかりをうけておほ内山乃
まつれたる年ふすのこつりまとも民のこゝろふ
むつこともなにはの芦もみとりになかめつゝあ
あつ風されとんはかこつす世をとふ旅は
ひさくされ空に立らんゆふさけは雲井の月は
いつめくりへてまつりをはふさまもしせいせあまり
出あひ乃春秋ふちなりふれこまとふ

まつりきの八隅しらてふちはやき世乃あめのしたを
こえぬるもはやれ中山あつくになかうなりをと
むかしけれ白ま乃下草ふミ分てさらにみちあ
いかしへ乃代よりをも今ねなけきのこつりの月日に
はさけふになまとともなしなかめして花も紅葉も
おりくの情はあつまとしりなかうつるえこそ
おりゆるひわかれしらの玉もなもかさえねかの
ちらなされふえともるもしつなくれよかれ川は
みかゝみていそとうしかとうつりきてちるきむりを
なよ竹の世乃人はみな夏川のいとれひさく

みな連は よりともおもはぬ 高き名に へくとよせん
とゝりふ まだのよれ いぶせくて 秋乃このまれ
ちまたくに そのことも おもほえぬ 筆のすさひは
露わけの 光もみえぬ うら見さへ 忘れはてゝは
入にける ほけ有ても かさあつめぬる

反歌

忠ふとゝと誰かはまほりは学かさつめてはおもさまたえ
後福光園摂政くれ給ての比源義将朝臣
のりとより年月なまよけるをおもて
やて給ひしに

権中納言雅縁

みすゝやま 木たかき松を 年ふりて はかなくちかき
なひとは あれもさそふ 志ら露の めぐりまねき
わすれえて 一ことなね みちのまれ 志るへとみるも
むかしより うつゝならは なよ竹乃 ひとひさえて
まちかねる 山の夜なを けはしきを かきとりつ
なほ道あらは 春いさていに ことゝそへ 夏いつことを
ましな結ひ なにさ物の 夕つゆも あはれとけ
ことはりも みや柏かる 冬草乃 ゆくなれ霜の
さえくつり 波志かへて こゝろもてと うきても尽きぬ

はや河乃なかれのまゝにしたかへは　これとしへて
月かけの雲にかくれて　ありかたり
弥陀なくあらはれそなき　極楽の　おさとふあそ
たのみ信いとなれるを　法のうへは　折つたる乃
はなそなきたえてせまて　わかされ　代よつゝ
なたうりと　おもひ河みと　あめのこやはせん

浄土宗乃心をよめるうた

頓阿法師

あさ日かけうつるのやまにいそきめて　山のたかねと
てらしけり　露けきやの　秋の乃月　雲かくれなし

わかまゝて　いそちは雲の　花乃色と　しるく法の
こゝろへし　やとよる身を　おもひきん　御ひかり乃道を
あらはそ　りりのさとれ　かうへ人　そらへとも浄す
おかなれと　心乃ありくと　さかりしまへの　ふゝ山ち
みちしふかく　わかにけとめぬ　さとりしそ　あらく御ちふ
なとりあれ　佛の御世を　ともまゝち　ふとかのちとせ
そやらむね　山さへりの　志てまち　もと念仏はよ
たまれさて　さくへ阿に　せさへれ　ふかさにふれ
おかうい　身は契り　とおかきれ　そともそ蝶の
世の中そ　おもひをゆへき　身なかね　何とおけきては

うれしさに　さひしさめぬ　このまゝに　わの上てし波
笛つまの　ひとりさえ身は　いつもせん　さそふ心の
むかしむかしに　おもひおもたて　みし人ゆく　みのりの門を
ひとさしは　十と五歳　をりをりに　いくのとしに
つれてこそ　うき世はやそて　まことすれとも　なさけにてけて
おとこもなく　花さくの代　つねなかれ　浮世をしおる
人の身の　よろつ浮世　ちらしから　身をしちらひは
思ひつめ　またいさとり　むかしけしそ　みなむきあさ
ことゝもの　さて浦のきつ　かへりなる　一声十ゝ思
とある事は　身のうちも　さかなに　春しき風よ
ぬきさへて　ちとせふ花よ　あくひてそ　たゝしの世に
うつりけり　なりし岩かを　つむ身の　風わちえる
かをあまそて　浪かさえちる　なまれしを　浪のちさとを
まこと浪そと　志かりおかは　なかにはなる　うつの心を
浪ゆかぬ　うき浪みのりを　さらてこれ　雅中に志み
うつりまて　りとの心の　めくられて　身をめゆまの
これ鳥の　色ねよろし　おもひまて　つとむことは
なにされと　おさめて拾ぬ　こゝろかれ　昔の光よ
てし浪まて　かけも我も　つてそあき　ふるきいはれを
志りぬ世は　なにつなかは　身ちかり　何世とさしに

うきふしは うちまそむら むらさきの 雲にむらへを
まちえしに 風くりみ ひともとの 色へあつ都を
はそ宮まて もそ小淳無の せきさとこえん やとるもちは
えむけかハ 月のみかと 力むともと 行りへて今ハ
わらやなもん

折句哥

十三夜といふ事をよみ侍りける

後鳥羽院御製

志ら浪や うらみの月は さゆる夜ハ 昔こそ恋し 山の秋風

よみなし

梅宗伎賀平

秋風そ みねの山かとへあて 浪おりきんこる念ふ
こいしきとさのふさ

高砂とりつつさなつはに 花ちのほたるとふされなから

物名

もみぢ

俊頼朝臣

萩花をおりすられや猿人の志らぬ山路に日をくらしつる

きしつと

澄覚法親王

冬されて色かハ花の空にもけしきとこゆるよみなきさ

正治百首歌奉りける中に

かうすゝめ

皇太后宮大夫俊成

おほさはの池の老くさふりゆけとかはらぬ秋の夜の月

ある人のもとよりあ(?)りふしせいかさあみみ
これ六くさの物をこせありけりと見て
露のみにをきてよみ侍ける

俊頼朝臣

我袖はまくりてほしてかはせともいそかなかにあふとみえん
かくみしさ

後八条入道前内大臣

何を浦やおほさらしかせ吹からにしき浪よりそ玉をむすふ(?)なれ
もみのえ
そねのよしあし

あま雲やそらにあまゆきひ海のかん照日なれともさそはれぬ
い

そしよの

前大僧正慈鎮

鴫乃ふすかりたのこの露しけき霜にしらつもそ荻の下風

誹諧哥

百首歌の中に

崇徳院御製

ねのひとて春の野ことにたつぬれは松にひかるゝうくひすのこゑ

賀茂重保

あやなくも風のおとつる梅か香にわかぬ袖さへうつりけるかな

灌佛乃心を

前大僧正慈鎮

りしきみのみわたしの志めの内にゆふの月をもながめつゝ
人々あまたひ侍ける所にて澄源法師につかはし
侍りけるはかりしをはらすとて

俊頼朝臣

おひしけるむすほれ枝の下にそめぬ蓮葉へやるとも
えの山によくうきさてよつり花しけるを
侍にかへきれしふなきこえへしとつくりさ
まそらとへてそゆふひかれはてゝもまひ
侍りける

備前親教

蓮も本しはよなつとふかれと法師もとそこうまされ

さるかりのなきさけつゝときて

頓阿法師

秋の野は露よりことにおくれてもとまる虫の声
なき月の光花さしてはとは
つゆもすとて

法印静賢

よみ人しらず

これをみよ菊よりわかふほかは色のみしふ人のあはれをと
そしる露のなさけあらはとかく

三條院女蔵人左近

志ちの野やこゝさにかけつ白露はみたれもしらすとかゝる
名にたかき野に侍りける人へふさ海をはる

たしありけれは　よう人へ志て次
ほむかしわかれは今はかくこそ行さのみこそ身にかくしけつ
題しらす　源親房
しつらめやわかそひさしみまれつゝひと夜くふにしひさらは
恋哥の中に　清輔朝臣
うすきぬのいふならとももろくよりまされるをみぬ君かな
契りし人へゆくとは返すよ恋しれはやとかりおもはるゝそ絶ぬる
寄花恋を　前中納言公雄
あつさゆみひきもとむへき別路をやよひはるとのかへりはし
法橋顕昭まうしてこさくはしきにつかとそけ
さとらすまかりけるを返しつかはす
とて　左京大夫脩範
なこりをは我もとゝめそふみまよふけさとゝまらぬ人をみるかな
返し　法橋顕昭
我はいさけさとゝめともあつまちをとにかくにうき旅なれは
源通清くまのよりかへりてとさて
まれもとや絶しさりけるになさけあしやと
申されし　藤原顕家
絶はてし今はかのほとに山の露にいたゝく衣ふきのせる
あひしりけりける女のもとにふみつかはしけれと

はらへしてはへりける

大蔵卿匡房

ちはやふる神もみるらむふなさはふりにおもひやるかな

筑前守にて國に侍りけるに日照して侍り

けれは雨のいのりに神によみ

てたてまつるとてよめりける

藤原経衡

雨ふれといのるしるしの見えてあまくたりみかみもあはれ

えひとふりのと人のこひよせさせるに

ありけるまに十九やなとて

大中臣能宣朝臣

世の人は海乃おきわれとふみわれと漕ていてちふねと

身すそあけ

新續古今和歌集巻第二十

神祇歌

衣さむみありせはゆかりて山はひとへにきまし物を

此うたは住吉乃御歌となん申伝へ侍る

とこへゆく君とあへやもいさかよりは海のまのゆるときくと

これは玉津嶋の御歌となん

花も陽さ葉もちらす一枝は吹あらしを世といてらん

これは北野の御歌となん

たひ家にゐしてきる時千枝の枝とよみ侍ける

勝定院贈太政大臣

世とゆたかの神乃恵も今も猶千枝の枝乃下け

文保百首歌奉りけるに

後照念院関白太政大臣

神ち山峯の松かえふりてそのみとしはわか君の為

神祇を

達智門院

くに風やふもとの家のや柱ひとつにまもり世をゆたかにし

貞和百首歌奉りし

等持院贈太政大臣

あまてる岩戸を出し神のあまてる神の恵てらさる

前中納言為忠

いせ河たかいかねのかはきれぬくさ世よりまさなすはし

題しらす　従三位雅家

すゝか川いはしせをなかれてもむかしの世そ神のめくみを

よみ人しらす

神風やみもすそ川のすゑとほくあふきてたえぬ跡はひさしく

神祇歌の中に　勝定院贈太政大臣

ともにこゝろいつちとわかまはそのいのりをも神そしるらん

大納言師賢

くもりなき君かこゝろのかゝみそあまてる神のやとりなれ

家にて三首歌よみ侍し時　左大臣

いそしめのさき清きなかれそたえてかはらぬ代にしるしき

千五百番歌合に　従三位保季

君をこそ神もあはれといはれけいのるかなりそみなはるまて

梅後緑翁院家歌合に祝の心を

よみ人しらす

神代よりかはらぬ流れあふいそ川千世の数をつむまても

建仁元年十二月石清水社歌合に

後鳥羽院御製

やはた山ゆく末遠きしめの内に万代かけて松風そふく

寛治百首哥に寄社祝

入道二品親王道助

なかれて千代をも行すゑに水ちかひまて今をかきりね

後法性寺入道関白太政大臣家百首哥に

従三位頼政

浅からぬ契とむすふ石清水のたのみても神のおもすゑも

前大納言経房家哥合に

紀行影

君かへんかはとこそ石清水千代もやちよも神にまかせて

治承二年神主重保よませ侍ける賀茂社の哥合に述懐

法印静賢

これをこそいのりしいそさたのむには神にゆかせん

諸社の奉幣使をたてらるゝ事三不り叙して後ちしめて賀茂にむかひて下の社より秋かけて上の御社にゆきて待かしむかし百度まうして志きりてまうけて出し侍小河原のありたるにまかりてや

くみしまはかゝりあらんちしけれは四つ世を
けり
皇太后宮大夫俊成
昔よりいはひはあしねたえぬもまもりの河を
神祇の心を　前参議雅有
神とみなよろこひ川よ流れぬきよくも世をいのられし
正治百首哥なり
信實朝臣
ちはやふるかもの河浪立ねまもるきみしとけぬまてふさき
賀茂社よみてまつりし哥中に
権中納言雅世
君をいのりかもの河浪絶えけてとむかしを猶そひさき
題しらす　賀茂秀久
君を守るかりの社のみしめ縄神も契をむすひをきし
大江茂重
たしあまはかものむかしの御代をそこそはまことの神にまかせて
嘉元元年伏見院よ三十首哥よみてま
つりける時社頭祝
権大納言俊光
ちはやふる神のみむろのやへ榊さとれる色を君のや　ちよ
神祇哥乃中に

祝部成久

神も又おもすみかとやかけてしめ縄なかく吉田に跡のたれけん

永和百首歌奉りし

後八条入道前内大臣

ちはやふる神の山の峯の松我も神代の事や植えし

皇太后宮大夫俊成吉田詣のときの松の

埋れとよみ侍りけるを思ひてよめる

権大納言為遠

末遠にといはひ契て吉田のはやとてや神もまもらん

弘安百首歌奉りし

藤原為秋

昔わかなれとさへ見るみかさ山いつかなる春の下葉なるらん

百首歌奉りし時

按察使公保

みかさ山さよりの春の末葉までかけてそたのむひろき めぐみを

吉田社にまうてけるに中にそのかみ参詣

雅経この社にまいりなからえられんをおもひ

て

権中納言雅縁

吉田山ふりにしをおもてこそその昔の跡を猶たのみて

契しらす

前大納言教良

紀の遠江かくそなしきもさくおもつこやねの神ならん

後福光園摂政家の哥合に吉田祭

正三位為遠

百とせとやまひ々りぬ君まてくらふ吉田の神祭哉

治承二年神主重保よみ侍りける賀茂

社哥合に　祐盛法師

やはらくる月の桂の光まてもよのやみをなをてらすらん

月乃哥の中に

前大僧正慈鎮

末の月に光をやはらけて神さひまさる巌の松

影しらす　栄仁親王

君鶴のやまと志ことふる遠き神代の名そ今もたゞしき

嘉暦二年内裏哥合に

前中納言通房

やはらくる神の心の流よりもうつりの光をこそ

續後拾遺集哀傷乃伎法眼行済

りきにかつりしまう

清原宗助

わか國は遠ひやそんみくまの神志るへのあさ世せい

たいのくちくまをふまゝして帰とて石代

王子みくらゐの歌

和気種成朝臣

むかしひかくの契も老の末なれは又ともえそいひける雲

麻苑院入道前太政大臣家にて人々三首

哥よみけるに寄道祝と

前大僧正良瑜

道分たとつたへてまれ山君をそのの万代まてふ

少壁祐よみてさゝりける哥の中に

入道一品親王永助

ゆりうらんあらん神をつゝむ七昔法のちへてきれた

松山といふ事を

前大僧正果守

みあかりけんよみの神山そ陶木ふとゝぬきゝれ松そふりぬ

貞和百首哥より

後三條前内大臣

うれしくはこもをうゝすおりにたるかやいそくみよの神松

神祇を

一品法親王堯仁

大ともえや松のかけを飛まいちゝみをおかみよの神さき

遠所より日吉社よみてたてまつりける

七首哥の中に

右衛門佐御製

紀の国はちるひは山のひおろしこそかくれる限りは今に

同社ありそまつりある寺に

法印経賢

宮にます星をめでゝと君か代をともにそ祈る七社のさき

後法性寺入道前関白太政大臣家百首に神祇

俊恵法師

行末やねかひをうつのうみまてと紀をなまはすらん七のおしんかな

祈なし心と　法印覚全

八十まて七の社につかへきて我か身に余るみつけなり

寄月神祇といふことを

前大僧正行雅

これも又宮にましますかけにてや月は神のめくみをそしる

承安二年廣田社哥合に述懐といふことを

六条入道前太政大臣

老ゆまでもたのみてたつゆく末をためしみ廣田の神にまかせつる

神祇哥乃中より

中原師光朝臣

わたの原おきにましますすみよしの神をあふきてまつ

弘安八年十月住吉に御幸ありて述懐

懐といふ事をよませ給ひける

亀山院御製

住吉の松は昔を知らめや二代の跡によるしらなみ

前大納言為世

君かためみちもかはらす年ふりて三代にあひぬる住の江の松

花しらす

土御門入道内大臣

いくとせをつもる住の江の松か枝に神代かはらぬ風の音哉

等持院贈左大臣

あむことはいまもすてすとも子の代をまもりてゆるせ住吉の神

住吉社によみてたてまつりける哥の中に

成恩寺入道関白前左大臣

波の花とかさしともなれ住吉の浜のまさこをかすにとりけり

俊頼朝臣

山里の障子の絵に住吉のかたかきたる所に

住の江に神さひにける松なれは涙もさこそ沖にみちてめ

寄江述懐といふ事を

津守国道

世をかけてふかくそたのむ住の江の浅きはあれと神にまつりて

百首哥よみてたてまつりし時神祇

雅永朝臣

まつ河海をわたりし道おちかひまてふかくそたのむ住吉の神と

この集おあはせいてこられし時和哥所の開闔よ

なさるゝよしうけ給りて浅からすまもり

給へし

権大僧都尭孝

稀まれ道わかれし流の源よりおへ道やたゝ神を頼しき

鹿苑院入道前太政大臣家にて人々に題を

さくりて三十首哥よみ給けり時述懐と

権大僧都尭尋

我まては三代よつゝへて玉津嶋ひかる神のめくみそしる

三代よ我みかみは我身にもあまるめくみに

こそ給へとてよみくたしけり

鹿苑院入道前太政大臣

我も三代人も三代まて道ゆゑにともにそみつる玉津嶋姫

應永廿四年新玉津嶋社遷宮の時権

大僧都尭孝よませ給ける百首哥の中

小社祇祝といふ事を

権中納言雅縁

今こゝにうつるともなき宮ゐかなもとの流乃玉津嶋ひめ

文保百首に奉りける

後光明照院前関白左大臣

くもりなき代々に光をかゝけてそ守るてふ玉津嶋ひめ

新玉津嶋社哥合 神祇

権中納言為重

わかのうらのしきしまの道代々をうけてまもるらむ玉津嶋姫

後福光園摂政太政大臣

あまのむらくもわか家の都よりうつしそめてし玉津しまひめ